

特71

592



301237-000-7

特71-592

愛と心(小説)

アプレウス/著

M34.11

DBY-0001





アプシウス氏原著

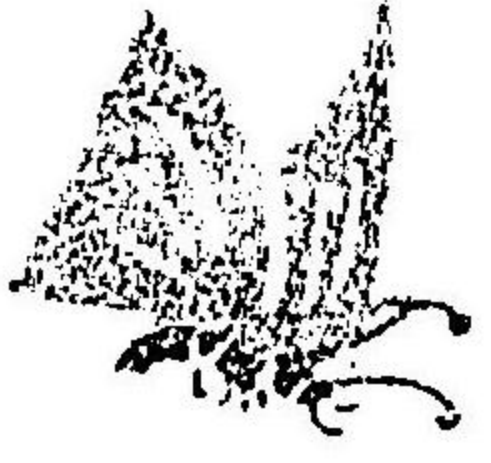
文學博士 元良 勇次郎 評編

文學士 戸澤 始 射 譯述

花



花二七



特71  
592



992

77W13889

「愛と心」の小説著者アペリウスの小傳

アペリウスは紀元後凡そ百二十五年頃亞弗利加の北海岸マドワラに於て一紳士の家に生れ最初カルセイサに於て後アモニスに移り高等教育を受け業成りし後宗教の奥義を探らんが爲め諸國を旅行し研究に多年を費したり後ある富貴なる寡婦と婚姻したり然るに寡婦の同族はアペリウスを嫌ひ彼に必ず賢術を以て寡婦の愛情を得しならんとして之を排斥し彼は此非難に對し長き辯論をなせり其書類は實に彼の偉麗の材料となる者なり其後彼は文學者とし又哲學者として盛んなる生涯を送りある時は僧侶となりたる事あり又公開演説に名を得しことあり死後カルセイサ及び他の町々に於て紀念、爲めに彼の銅像を建設せし事によりても衆望の彼に歸し居たるを識るに足る彼の著述少ならず且就中「愛と心」の小説の如きは最も有名なるものにして其中にブレト、哲學の精神を顯し居たり  
原著は「リオン」語を以て書き其材料はギリシャの神話より取れるものなり  
明治三十三年二月及び三月のオーブンコート雜誌北米ラカマ市發行上其英譯掲載されたり之を讀むに現今我國の狀態に思ひ當ること少なからず故に文學士ハ譯氏に請ひて之を翻譯すること、なしたり

明治三十四年十一月

元良勇次郎



津波の府陰

小川一眞製

## 次 目

1	オフロヤントが脱敵	一
2	犠牲	七
3	驚くべき宮殿	十一
4	春愁	十九
5	陰謀	廿五
6	疑懼	三十
7	秘密は解けたり	三十五
8	神野	四十一
9	詰責	四十四
10	探求	五十一
11	服従	五十六
12	三雅楽	五十九
13	死の郷土	六十六
14	結婚の宴	七十二
	附「愛さ心の説に就て」	元良博士



小川一貫製

津波の府陰



小説  
愛と心

アプレックス氏原著  
文學士戸澤姑射譯述

第一回

希臘の上代オリンパスの神達まだ世界の司權を握らせ給ひし頃の事なり  
き、さる國の王とそが妃とに、美しき三人の姫君を有たせ給ふがありけ  
り、一の君其名をメガロマサス、二の君其名をハスカニアといへるは其  
に類ひ稀なる美人なりしが、三の君其名をサイクといひしなん更に姉君  
達に立優ること幾段なるを知らず、その美しきこと人間の言葉をもて云  
表さんやらもなかりける、げにや自然はたゞ此一人の乙女を飾らむが爲

めにそが寶殿に時ひたるあらゆる美を惜げもなく投げ出したりとおぼし  
されどサイケは其性甚くおごそかにして恨み深く、常に貞節の守護神た  
るアルテミス (Artemis or Diana) を崇信し、彼の戀と美との女神ウ  
プシーナス (Venus Aphrodite) の華麗なる祭日をば忌まはしきものに思ひ  
なしぬ。

成年の事なり、仔細ありて三人の姫達打揃ひ、此女神に事ふる巫女の役  
を務むべき旨所望せられしに、サイケは此榮譽ある所望を拒みて女神の  
怒に觸れしを、父の王と母の妃と彼女が宗教の務めにおろそかなるを詰  
り、辛うじてその役目を勤めしめ、祭事の控に從て此美神の神殿に事へ  
しめしとありき。

其時サイケは定め時刻に群衆の前を過ぎて静々と祭壇に歩み寄りしに、  
處女氣のうろくしげなる美はしさに打たれたる群衆は、たゞ茫然とし

て我を忘れ他を忘れ、只管彼女に見入りたるばかりなりしが、遂に感極  
て叫び出しぬ、「美の化身とは此君なり、此君こそは生きたるアフロヤツ  
ト(ウプシーナス)なれ、此君こそは實在の愛の女神なれ、かく云ひつゝ彼等  
は彼女が脚下に花を擲ちつゝ、恰ら彼女はまことのアフロヤツトならんや  
うに随喜渴仰の涙に咽びけり。

間もなくサイケ姫が美人の噂は隣國に聞え亘りて、ウプシーナス女神の化  
身人間に現はれたりとの噂は口より口に傳へられぬ。

されば、ウプシーナスを祭る殿堂のある地 ハッホス (Haphus) シニメヌ (Cithna) なる地、シセマ (Cythera) なる殿堂  
は今や一人の參詣者を有せず、アフロヤツトの神像寂として祭壇の香烟  
空しく冷灰の名残を留むるのみ、苟も此戀と美との女神に向て拜禮と禱  
祈とを捧げんとする輩は、昔なサイケ姫の前に額つきて、女性の理想な  
るべき此可憐の王女を崇拜しぬ。



かくてあらゆる尊敬とあらゆる崇拜とは人間の一少女の上に惜げもなく注ぎかけらるゝを見て、アフロザツトはいきまき立ちて語りぬ、「宇宙の聖母萬物の本源なる此のわれは、賤むべき人間の一少女の爲めにわが地位を奪はれんとするか、彼女が姿のはたとひ朝日の如く赫奕たりとも、彼女が血統はたとひ最舊の王統の如



われに似通ひたりとの故に、わが神聖なる名は妄りに彼女に擬せられて汚されむとすなるか、瞬時の美に誇る地上の乙女に、最大美の賞牌なるわが黄金の林檎を引渡さるべきか、あらず、彼女が顔ばせ

く貴かりとも、われは彼女にかばかりの潜越を許しはせじ、さなり惡むべき潜越の罰はかうよと直ちに思ひ知らせてんす。復讐の念に驅られてウヰーナーナフロザツトは海より出で來り、直ちに其子エロス(Eros)を召寄せつ、母の慈愛をもて此の翼生ひたる放縱兒を引見して命するや、わが子よわが指し示す地上の一市に飛往け、さらば其處なる王宮の中にサイケと呼はるゝ王女を見出さむ、其王女こそは汝の母と其美を競はんとする不敵の狂女なれ、汝は汝が弓と矢とを執て彼女が心臓に擬せよ、さて彼女をしてはかなき戀の奴隸たらしめよ、さらば彼女は眼眩みていつしか名譽を棄て自尊の念を失ひ、已がおろかさの爲めに忽ち美を害ひ品位を墜すに至るべし、誰にてもわれ神と争はんずる輩は、荷酷なる拷問を経て、苦痛と悲愁との間に死の郷土に下り行かせでは止まじ。

命畏みてエロスは直ちにサイオンが父なる王の宮殿として出立ちぬ。やが

て王宮の果園

の上に飛降る

や、先づ林檎

の樹の葉陰に

其身を忍ばせ

恰も彼の獵夫

が其矢を放つ

前に熟と獵獸

の舉動を窺ふ

らむやうに。

さてフロサットはエロスが姿の遙か彼方に消え失するを見て海原越え



ひそかに宮闕の

中を見入りて微

笑みつ、母のフ

ロサット將た

其子エロスがか

ばかり快く母の

命を畏みたるを

見て思はず満足

の微笑を漏して

けり。

て己が家路へと志しぬ。海神ネレアスが(Coris)女なる多数の人魚(Cyrena

は彼女に恩従しぬ。海豚(Dolphin)は貝殻のの轆車を曳きて波上を走ら

ぬ。トリトンは上半身は男性の人間にて下半身は魚類の如き海神、されは人魚の雄の如きものなり

トトリオン(Triton)の一群は更に此のはてやかなる一行を擁して波中に

躍り狂ひたり。又彼等の或者は女神の前に鏡を捧げ、或者は貝を吹鳴ら

して音楽を奏し或者は水泡の薄絹を擡げて日の光を遮りぬ。さて一同は萬

物の創造者世界の聖母なる此美神の身邊に隨喜満仰しぬ。

第二回

サイオンがさばかりの美しさも自身の爲めには何にかはせむ實に人々はサ

イオンを崇拜し又讃嘆しぬ。されど彼女を我が妻にと敢て所望する者は一

人もあらぬなり。縦し我こそはと大膽に云出る者あらむとも所詮彼女が

夫たるべき価値を備ひて彼女を満足せしむるに足るべきものあらむとも

思はへず。二人の姉君は皆な嫁して何れもさる國の王妃となり。睦じく

過ぞし給へり、されどサイケは恰も寡婦の如くに父王の許に在りてわが御命を嘆じその薄名の源たる巳が絶世の美容を惡みつゝあり、父の王は思へらく、かく姫が縁違きは神達の怒らせ給ふ事ありてにはあらずやと、乃ちアルヒなるアポロの神託を伺はせしに實に次の如き詔宣を得たり。

はしきやし此美はしの處女を山の顛に導け、さて裝ふに花嫁の禮衣を以てし、墓に入り得るの覺悟あらしめよ。

婚禮の祝歌と共に葬式の挽歌を唱へよ、天上にも地獄にも權勢及ばぬ限もなき、彼の恐ろしの虚主こそ、處女が嫁ぐ拜金なれ。

敢て此神命に背くとなく、謹み畏みて服従せよ、喜びは悲みと雜りて來らむ、處女の死は即て幸の前兆なれば。

此託宣の知れ渡るや國を舉て皆な悲めり、別きて父の王、母の妃が愁傷の程は如何ならむ、されどサイケは平然として父母に向て云ひけるやう

さばかりの御泣き悲みは何故ぞ、こは妾が美しさの罰なるものを、あらゆる人々が妾を美中の美と稱へ愛の神なるアフロテイトなりとして妾を崇拜したることなか／＼嘆くべきにてはわれ、此上は一刻も御猶豫なう神託に従はせ候へおはれアフロテイトの神はたゞ一柱こそおはせ長へ美の鑑として崇拜せらるゝの榮を繼にするは、たゞ此女神一柱にておはすものを妾は早や斷念め侍りぬ、運命が妾の爲めに定めたる、其恐ろしの夫をば妾は喜んで迎ひ侍らむ。

神意背き奉るべくもあらねば、おはれなる王と妃とは纏てサイケが葬送の婚禮を營みつ、婚禮の炬火は點されぬ、されど其光りも王女の爲めにはたゞ暗慘として輝かず、婚姻の祝歌は唱ひられぬ、されどもそが音調は何時か物悲しげなる挽歌の如くに沈みゆくなり、王女は價貴き衣服をもて裝はれ、得難き花をもて飾られぬ、されど面衣の下はたゞ涙をもて

濡されぬ。

かくてサイケは都を出で、或高山の頂に導かれつ、僧侶は涙ながらに此大禮に侍り、人民は哀なる王女が運命を傷み嘆きぬ、式凡て終るや此處迄王女を見送り來りたる朋友知己其他彼女に對して荷くも同情を表はさんと力めし者其の大群は何れも都へと引還せしが、唯王と妃とは暫し後に残りて不運なる王女と盡きぬ名殘を惜みたり、されど何時迄さてあるべきならねば遂に別れ去るに臨みて、サイケは叫びて云ひぬ、「父母の君さらば、異々も此上に御愁傷ばしおらせ給ふな、それこそ妾がせめてもの慰めに侍り、妾が名は妾が運命の讎なることを御記憶おらせ給へ、(サイケなる語は精神を意味する故に此言あり、即ち彼女の軀は葬られても更に精神のみは前にも優る光彩をもて再び此世に現はれむとの意を道虫の一度は幽と爲て前半の生活を終れども、更に美しき蝶と爲て出来るに喩へた

るなり)妾が定運は彼の美はしの蝴蝶の命數と、目には見えぬと堅固なる鑽をもて維がれて侍るなり、彼の地上に盡々たる道虫は蛹と爲て一度我身を繭の中に葬ひれども、時來れば更に此世の者とも思はれぬ美しの者と爲て出で來るには侍らずや、其時の彼が軀は天上の靄氣と虹の七色とより成り立ちて、恰も翼のある花の如く、人間の思想の活きたる譬喩とも見らるべく、人間の精神の此上なき表號とも見られ侍らむ、さて此の如きは誠に妾が運命にこそ候はめ。

第三回

暗愴たる寂寞の裏、サイケ姫は獨り山嶺に留まりしが、熱さをもて惱まされ、別離の苦みをもて疲れ果て、何時しかうとくと眠り入りぬ、暫して稍や氣力を恢復したる頃、夢の中に涼しき微風の熱き頬にそよぎつゝあるを感せしが、こはエロスの命に由りて忍び寄りたる静かなる夕の



くこそ来つれ、美しの花嫁、此處こそは卿の家なれ、この家こそは卿の夫が卿の爲めに設けしものなれ、卿はこの家の主婦たるべし。 姫は驚いて見廻はし、人があらず、空気が香りをもて充たされ、詔は音楽の如くに響きたり、されど此語の主は目に見えず、形なき者の姫が身邊に飛翔しつゝあるよとおぼし。

「いふは誰ぞ、姫は問懸けぬ、卿を迎ふる卿の夫なり」とは答の詞なりき、姫は驚き呆れて息も絶々に云ひぬ、「誰にもせよ卿が形を現し姿をして卿が姿をまともに見るを得せしめよ、運命が妾に授けたるわが夫は恐ろしの虐主にて、天の子も閻府の子も齊しく恐れ憚るいみじき怪物なりと聞けるに、早や卿が有の儘の姿を示せかし、伴りて優しき姿に化しなどし給ふな。」

彼の聲は答へぬ、いとしの花嫁、願くはわが愛を受けよ、さて卿が夫を

信用せよ、動かし難き御法はわれをしてわが姿を現さしらしむるなり、さはれ夜に入りて鳥羽玉の間我等を覆はし、われは卿と共にあらむ、卿は其時わが現身を觸知し、わが果して卿が思ふ如き怪物なるやあらずやを判じ給はむ、今はたゞ無用の心遣ひを止め、わが婢僕をして卿に冊くを得せしめよ。

さてサイクはこれより此宮殿と廣やかなる庭園とを仔細に視もて行くに、目に見えぬ婢僕は一々室内の繪畫寶物等を説明するなり、たゞ一目彼等の姿を見てしがなと思へど、彼等は空気の如くにして捕へんとすれば恰ら鳥の如くに逃れ去りぬ。 庭園の中をさまよへる後、姫は沐浴して食卓に就けば様々の珍味佳肴は目に見えぬ手もて具へられぬ、轉て夜に入りて美しき寢室に退き、中より扉に輪下せば此世のものとも思はれぬ樂の音は床の周りに響きたり。

されど姫はいと身の淋しさを感じてよと泣きぬ。あはれ懐しの父母  
同胞さては友垣結べる人々に再會の期は長へに絶果しなりけり。さはれ間  
もなく眠に就けば心地善き夢は姫が精神をさばやがしめぬ。  
突如姫は或る暖かき腕のわが身に觸るゝと同時に、唇の上に燃ゆるが如  
き接吻を感じて目を覺しぬ。何事の起れるにかと思はず戰慄せしが、先  
刻に聞きしに同じき優しき聲は恐るゝ姫をなだめて「恐ろしとな覺しそ、  
夜の闇脚を圍ひともわれは卿と共にあり。わが愛は卿を護るべし。縦令  
卿「死」の門を過給ふとありともわれは不思議の幻術をもて尙ほ卿を護るべ  
し。縦令脚陰府に降り行かせ給ふとも卿は尙ほ死せざるを得べし。卿は  
わがものなり。オーわが魂魄なり。さてわが一身は又卿の有なり。われ  
は愛なり。世界の喜びなり又生命の給與者なり」。  
喜びの情はチャイナが精神の底にまで徹しぬ。彼女は己が腕を據げてかき

探れば、人の世の花なるべき少年の軟かなる體をしかと抱きしめたり。  
姫は香ばしき呼吸を其類の上に感せし時歎極て戰栗しつ。「卿はそも如何  
なる御方ぞ。地獄の鬼共の中にも尤も恐ろしくゆゝしき怪物への犠牲  
としてかく棄てられたる此身をかばかり憫み給ふはいかにぞや」。  
少年は低き聲にてさゝやきぬ神託に所謂怪物をば恐れ給ふな。此わこそ  
は實に其怪物なれ。天の子も閻府の子も齊しく恐れ憚るといふ妖魔は此  
われなるものを。われは卿の夫なり卿はわが花嫁なり。「げしかることを宜  
ふものかな。眞實御身はツォイヌの神も恐るゝといふ恐ろしき地獄の支  
配者なる「死」其者ならば。何故にかゝる優しさを裝ひ給ふか。御身の聲は  
音楽なり。御身の呼吸は薔薇の香りなり。御身が唇の接觸は姿が精神を  
して驚喜せしむ。そも〱御身は御名を何と申す君にておはすぞ。優し  
き聲はさゝやきぬわが名は「愛」と呼ばせ給へかし。われは其愛なる者なるよ。



かくてサイキは此目に見えぬ夫と二世を契りつゝありし間に目に見えぬ  
一組の怜人は婚禮の祝歌を唱ひたり。

オ「愛と死よ、死と愛よ、  
なれば不思議の血族かな、  
さてこそ宵の明星は  
即て夜明の明星なれ。

オ「愛と死よ、死と愛よ、  
一命果てゝ一命生る。  
げに太陽は登り太陽は沈む、  
かくても太陽には變りなし。



人生の疑問はさて解けぬ、  
いでや此方へ、戸は開かれつ。  
オ「愛と死よ、死と愛よ、  
汝は不思議のやからかな。

第四回

かくてサイキは不思議の夫と共に楽しく口を送りしが、たゞ其夫の素性  
の異なるゝになん、少なからず心を悩ましぬ。晝は森に住む鳥獸のいと  
よく人馴れたるが来り慰むるあり、將た例の目に見えぬ婢僕の懇ろに冊き  
事へつゝ心の中に思へる事をさへ能く悟りて辨じ與るゝあり、さて夜に  
なれば彼の妻を見せぬわやしの夫は歸り来つ、されど彼は親切にして優  
しげに、時にはざればみかくる事などもありて、常にたのしげに快活な  
り。



彼と共にあるは限りなく嬉し、彼が談話は限りなく樂し、彼が言語は時として高尚くしていと重し、されど時としてはざればみていと輕し、忽にしてフラーの哲學の如く深しと思へば、又忽ちにして滑稽諧謔をさへ交ゆるなり、おはれ一人にして多くの矛盾を兼ねるとかくの如きを得べき歟。

サイケは秘密の説明を道れども無効なりき、彼は凡ての間を側に外らしつゝ、はては凡ての疑を棄て只管彼を信すべきを命じて云ひぬ、「疑問は卿の上に危険をもたらずべし、われは彼の神託にありし如き恐ろしの怪物なるか、そは卿自ら判じ給へ、さては怪物といはるゝ者も人々の思ふが如くさばかり恐ろしきものにはあらぬならむ」。

ともかくも夫の側にある間はサイケも己が身の上に満足しぬ、彼はサイケの悲みを笑ひこかしつゝ、あらゆる幽微を忘れしむるなり、されど夫

の去りし後には限りなき淋しさを覺えて、彼の目に見えぬ婢僕共の慰めも次第に嫌厭を催さしめ、夫の何者たるやを知らであるの苦みは、或る夫は悪魔なりと名乗るを聞くの苦みにも優れりと思ひぬ、かくて此美しの花嫁は遂には家郷の事をのみ思出して慕ひ焦るゝに至り、山の彼方の小麥繁れる廣き平原の中に住へる父母同胞達は如何しつると悲しさ懸しさ湧くが如く、いと奥まりたる淋しき場處に往きては、憂悶の荒すがまゝに胸を任すをもてせめてもの慰めとしたり。

茲に又姫が兩親なる彼の國王と王妃とは子を失ひし悲み何にかは比へむ、わきて此姫こそは二人が中の最愛の子にして命にも換へじといつくしみけるものを、せめては二人の姉姫達を呼び寄せて、此悲を紛らさんとて直ちに使を發しけり。

姉姫達は來りたり、されど父母の悲は容易に慰めらるべくもあらぬに、

かばかり父母に思はるゝ妹は冥府の王なる死の聲中にある身の上と思へど尙ほ妬ましさ抑へ難くぞ感じける。さる間に親思ひなるサイケは屢ば夫に向ひ故郷の消息を尋ぬるに、夫は二人の姉姪父母の許に在す由を探り來りてかくと告ぐ、サイケは此消息を聞いて故郷を想ふの念更に高まり姉君達と逢ひたし語りたしと思ふに今は矢も楯も堪らずなりぬ。

此有様を見て夫は容を改めて云ひけるやう、われは卿の爲めにわが爲し能ふ限りを爲さむ、さきに卿が人界を出立したる彼の山嶺には、卿が記念像の打建てられたるが、そを見んとて姉君達は來らるべし、われは其時卿をして姉君達と會見せしむべし、されど卿は忘れても詞をかわし給ふな、そは卿が上にも我が上にも禍を來すの緒となるべければ、卿が人界との交通は長へに我等が婚姻の歡樂を奪ふべし、美の女神にして又オリソ

パス山に神集りに集れる神達の中にも威權おさく、並ぶ方なきウサナス、アフロサットは尙ほ卿が敵にて在すなり、さればわれ等が中の愛は秘せざる可らず、われ等が前途には様々の障礙の横はるあれどそは卿の知らざるを可とす、アフロサットの女神は今や卿は全く死せりと思し給へり、女神は實に卿の滅亡を企畫し給へしなり、されどわれは決して卿をして不幸に死せしむるとなかるべし、若し愛は不思議を成し得べくんば、女神の御怒りにも拘らず、われは卿をして尙ほ幸福ならしむるを得べし、サイケは夫を烈しく接吻しぬ、夫は更に語を續き、われは尙ほ婢僕をして一層まめやかに卿に冊かしむべく、卿が冀へるあらゆる娛樂は喜んで供給せしめんと思ふなり、されど此語は却てサイケをして奢侈の中に過す疲憊の苦しさを想出さしめつ、彼女は頭を振りながら少し焦つて答へぬ、  
妾は寧ろ彼の婢僕等が妾に娛樂を與へんとして付き纏ふを厭ひ侍り、妾

は彼等が差出がましく立騒ぐをげに堪へ難く覺え侍り。妾は彼等が前にあるか後にあるかを知らぬはざるを不快に思ひ侍り。彼等は恰ら看守の如く妾に服番しつゝあり妾は全く囚人の如くに侍り。捕はれて長なへに己れの朋と絶たれたる島の身には黄金の籠も何にかはせむ。姫はよゝとばかりに咽び入りて慰むる夫の詞も耳に入ればこそ。却て夫の無道を罵り遂に姉姫連に會談を得るの約を確めて儘かに靜まるを得たりけり。たゞ夫は附加ひて云へぬ。され意を用ひて卿と吾との中には何人にも隙を容れしめ給ふな。はた吾が人格に關する秘密をば夢にも口走らせ給ふな。卿若しわが此命令に背き給はば吾等は永久に別離の苦痛を味ふべし。

サイタは固く夫の命令に背かざるを約していとしのわが夫卿に別れせむより妾は寧ろあらゆる歡樂を擲て死に就き侍るべし。

目に見えぬ夫の曉方に立去りし後、サイタは纏て二人の姉姫に逢ひまゐらせ。懐かしき父母の君に慰藉の詞を傳言てまゐらすを得なむとの希望をもて勇み立ちぬ。

## 第五回

メガロメナス、マスカーニア二人の姉姫は、彼の山嶺に赴き妹が彫像の上に美しき花冠を蒙らせなどしてありし時、サイタの命を受けてセッハー風の神は彼等を此處の宮殿の前に伴ひ來れり彼等は地獄の底に墜されつゝありしが如き感を得して目眩めさしが、彼等の脚が再び地上に直立するや周囲の光景の驚くべき變化を見てたゞ呆るゝ計りなり。何等壯麗の建物ぞ彼等が眼前に現れしは、さて其大理石の圓柱の間に彼等が妹は立ちて居つ。姉君達妾が運命をな嘆かせ給へと、見給へ妾は幸福に侍り。妾は苦痛といふもの悲みといふものさては心遣ひといふものを少しも知り

侍らず、いで先づ妻が住居に來らせ給へ、さて妻が幸運を喜びて給ひた  
まへ。

かく云ひつゝ、サイ  
メは二人の姉を抱  
きし後手を執て導  
きながら、先づ妻が  
新しき住家を見そ  
なばせ、さて妻は  
尙ほ健在にたのし  
く暮し居る由を父  
母君に告げ給はれ、  
の賓客は心中に起り來る嫉妬の念を盡ふと能はざりき。



さらば父母君の御  
愁傷を和めまゐら  
するを得候ひなむ  
サイメは心密かに  
わが夫の武能を誇  
りかに、光彩陸離  
たる殿堂廻廊の間  
を導きつゝ、二人  
の姉にわが住家を  
見せしめぬ、二人  
彼等は各有力な

る國王の皇妃の身にして榮華を心の儘にふるまへどもかばかりの莊麗  
奢侈は生來嘗て見たることあらぬなりき、遂にハヌカニフはサイメに向て  
其夫に遇はせ給へと發言しつゝ、父母の君は卿の夫が如何なる人にて在るか  
を知らむと切に冀ひ給ふべし、はた如何にしてかゝる富貴を得給ひしか  
を知らむとやし給はむに、願ふは吾等に遇はせ給へかし。

サイメは折あしく夫は不在なればと辯解しつゝ、さらば彼が容貌は如何な  
る人ぞと問はるゝに及び、夫の訓誡を想起しゝかば、其如何なる人物な  
るかば勿論、其顔ばせをも見たるとなしといへる事は成るべく云はぬ様  
に避け、さて欺いて曰へるやうわが夫は若くして風采宜しく、大なる財  
産を有し甚だ遊獵を好み、されば多くは山中を跋渉して日を暮し夜は屋  
ば遅く家に歸るとありと。

聽て姉姪達は再びセフの翼に乗て山嶺に送り還されしが、それより父

王の宮殿への途上今日見たる事共に就てかにかくと語り合ひ、妹が身上をば痛く批難したり、メガロメチヌは云ふげに運の神は盲目ならずや、取立て、云ふべき程の才能もなく、はた美しともわらぬ、愚かしき一處女にかばりかりの賜物を下さんとは、彼女が美は皮一重の美のみ、青春の期と共に羨み果てんは目に見る如し。

パスカニアは云ふ、美しきとは實に美し、されど鷺鳥の如くに愚かしきを奈何せば、學びの窓に於ても彼女はいつも運鈍に、何れの藝能にも達せしとなかりき、さばれ吾等が彼女の夫に遇はむが最後、吾等は彼女の愚かしさを指摘し示さんに彼女は其時嘆きの淵に陥るなるべし。

さて次の夜サイケが不可思議の夫は還り来りつ、サイケに告ぐるに二人の姉は彼女に對して隠謀を企てつゝわれは爾今彼等を信用せざるべきを以てし且つ云ひぬ、わがいとしの新婦よ、最早再び此等の毒婦を見給ふな、

卿は所詮彼等の敵手にあらず、卿は事もなく彼等の爲に欺かれ給ふべし、されどサイケは夫の注意を心にも留めず、已れを安全と信じ、妾は心を用ひて秘密を守り、妾が全くわが夫の事を少しも知らぬとの悲しき事實を巧みに秘し了せしにあらずや、妾の夫は其愛妻に妾を示すを欲せざるよしを告げたらましかば、姉君達は如何にそを怪しと思ひ給ひけむ。夫は云ひぬ、卿は一大危険の吾等を囁かしつゝあるを知り給はじ、われは異々も卿が謹慎を守り給はんことを誠めまゐらすなり、そは當に卿の爲めのみにあらず、將たわが爲めのみにあらず、後に吾等が中に生れん稚子の爲めに、若し卿姉君の爲めに眼かされて、わが正躰を發見せんと試み給ふとあらば、われは卿と別れざる可らず、そは八百萬の神達の怒を招くべく、その怒に反抗せんはわが力の及ぶ所ならねば。

第六回

彼二人の姉妹は再び山嶺の記念像を訪れぬ。サイナは夫の誠を忘れて又もセラーをして彼等を殿堂の中に迎へしめつ。昔語りにななき樂を感じたり。されど彼女は此腹黒き二人の姉妹が好言令色に惑はされて胸に一物深きたくみのありぞとは少しも心付かざりき。雖て物語は轉じてサイナが夫の人となりの事に及びしが、彼の並々の人物ならぬは明らけし。さて彼の偉大なる富とサイナの一身を取巻く不思議の現象とは何處より得たりしや。こゝに疑問は彼は神なりや、はた魔なりや、オリンパスの一員なりや、はた閻府の妖なりやといふにありき。

メガロメナスはいふ、「かばかり多き外國の産物を集めて此殿堂を飾りしとの不思議さよ、埃及、希臘の寶物はいふに及ばず。此處に印度の象牙あれば彼處にパールナツク海の琥珀あるにあらすや、オー、わが夫は富める

商人にて外國の地に二十餘年を費したる人にて侍るものとサイナは答ふ。

「こはおもしろしと姉妹は驚きし振していふ、さらば卿の夫は大なる經歷を有する人にて賢明沈着、わが今迄想ひしが如き一青年にはあらじ——卿の如く若く慮りなく又無邪氣なる一青年には。」

サイナは微笑みつ、假裝の蛇のかゝる事云ふとは疑ひもせで答へぬ、「げにわが夫は尤も好き年比にて寧ろ中年に近しかく云ひつゝ又夫の真相に遠ざからむ方よかるべしと考へしかば、されば彼が頭には折々白髪をさへ交へ侍るなり。」

サイナは不注意にも前日云ひし事を忘れて、かく矛盾の言をなせるに二人の姉妹は互みに眼と眼を見合せて、またり顔なるも妬しや、一の姉妹はえたりと語を續き妾にはたましひの底に起り來れる疑ひあり、妾はそ

を制へついたられど——オ、妻は恐る。妻は恐る——と云来て咽び泣きに泣き出しつサイケは驚てこは何事を姉君、姉は答ひてオ、何事にもなし何事にも——妻はたゞ思ひぬ——されどこは妻が胸の中のみ秘め置き侍らむ。

サイケは疑懼の念充ちて否な、語り給へ姉君、妻は卿の思ひ給へることを承らでは止まじ、妻の疑はしと思ふ事を知り居らむは妻が萬一の事ある時の爲めなるべきに。

かく妹に幾度となく乞はれし後姉は叫び出しぬわが親しき妹よ、妻は卿を爾かく愛すればこそ卿の不幸の人たらむをかくは恐れ侍るなり、こはたゞ妻が無用の心配ならむ、されど卿が夫に關しては恐ろしき秘密あり妻はそを思へば卿の身の上に不慮の事あらむを恐れて覺えず戰慄し侍るなり、卿は夫の爲めに恐ろしき誓を立てさせられて、事實を妻にさへ秘

め給へり、されど同胞の愛は鋭き眼を有せり、わが愛は卿が卿の夫の秘密を覆へる其黒幕を洞觀し侍り、卿は昨日彼は若者なりと宣へり、さるに今日は事ろ中年に近しと云はるゝならずや、オ、妻は口さがない世の人々が喋々せる噂にも眞理あるを恐る、彼等は卿が世にも恐るべき怪物なる、赤兒を取て嗜ふ妖蛇の妻となりしとを噂し合へるぞや、其妖蛇は美しき姿に化して卿を欺き、卿が彼の窟を宿して赤兒を産み出す迄待ちたる上、其赤兒と共に其母をも呑まむとはすなりと聞く。

サイケは驚愕の餘り暫しは惘然として立ちたりしが、遂に實は未だ嘗て夫の姿を見しとなき由を白狀せり、さて更に附加へてさばれ彼が身うちの肌觸りは美しく健やかなる若者の如くに感せられ侍り、姉姫達はすかさず聲に應じて妖蛇はげに其容を自由に變すと聞く、又凡て恐ろしき怪物は夜なく谷間に下りて曉方には早くも立去るとかや、彼等は日の光の

中には其化粧を支ふると能はず。太陽の光線一たび彼等が身に耀けば彼等は直ちに己が本来の姿に立還るなりと聞き侍り。』  
 『びに今こそ了解し侍り、サイクは氣も顛倒して叫びぬ、神託は事實を宣へり神達に虚言はなきものを、妾は初めよりかくと悟るべかりしに、妾はたばかられぬ。妾が夫は妾に彼の顔を見んとするの念を起さざらしめん』  
 と力め、妾をば籠の鳥と幽閉せり、オ、あぢきなの身の上や、これは如何にせむ何とかすべし。』

姉姫は口を齊へて親しき妹よさばかり力をな落し給ひそ、妖蛇の人の形に化してある間は常の力を失ひ居れば容易く征服し得べしと聞く、卿に付き纏へる其妖蛇は疑もなく卿の美に迷ひ居り、卿に害意あらむなど、は思ひも懸けざらむ、卿は今希臘國の名高き女丈夫となるの機会を有し給へり、彼は今夜も常の如く卿を訪ひ来らむ、さて長き道程を飛び来るの

疲勞と卿の愛に溺るゝとの故に何心なく眠り入る時、卿はやをら身を起して眠れる彼を刺し殺し給へかし、さらばサイクよ卿は如何なる名譽を得給はむ、此世の中より人の赤兒を陥ひて幾多の不幸なる母を作る此憎むべき怪物を取去る時、卿が得給ふ名譽は果して如何ならむ。

## 第七回

腹黒き二人の姉姫の還り行きし後、サイクが胸は獨り疑ひと揺れとをもて充されぬ、精神は擾亂し頭腦は荒るゝ海の如く忽ちにして彼妖怪を刺殺さんの臍を固めしかと思へば、忽ちにして又其決心も弛び、忽ちにして、假装の怪物を憎むの念禁と難く、又忽ちにして夫に對する愛憎の湧き出るを奈何ともすると能はず、そもくこは如何にせばよからむ、はた事の真相は果して如何なるべき、そもくわが身の行末は如何になり行くにや。



夜は来りぬ。目に見えぬ夫は現れ出て、夫婦が寢室の中に入りぬ。花嫁は懼れを制へてそを迎へぬ。彼女は面に平穩を装へとも心の中には恐ろしき考、邪推、疑惑、躊躇、決心等の嵐の如くに吹きすさぶを覺えたり。夫は二人の姉妹の仕打を氣遣ひ、晝間サイケが彼等と相見しや否や、はた彼等は如何なる事を云ひしやを尋ぬるに、哀れなるサイケは今日も再び彼等と呼迎へしと、彼等はサイケの身の上に就て痛く心遣なしたると等を告げ得ざりき。げに彼等が心遣は理りなり、女の身に取ていつかは己が生むべき子の父たる人を見もし知りしも得ざるが悲しからずや、其女を愛する者共のその身の上を心配せざるを得べきか、サイケは泣て若しわが夫まことにわれをいとしと思はば實の相を顯し給へ、事の真相を確り得ざるは如何なる苦にもまして苦しと迫りたり。

「卿若し吾を見れば卿が幸福は直に消え去らむ不可思議の若者はかく答へぬ、

「吾とは信じ給へ、さらば何事も憂ふるに足らず、疑或は卿を破滅の崖に導くべきに憂しくして方ある此詞、誠籠れる夫の雅びたる其聲にサイケは再び心和らぎ、身を夫の抱擁に任せ只管彼を信じ彼を頼らむと思はざるを得ざりき、かばかり憂しく情ある彼がいかに彼女を欺かんや、間もなく彼は眠り入りぬ、されど憫むべきサイケは尙ほ心穩かなるを得で未だ眠らでありぬ。

サイケは性來おこそかに憤み深き方なれば、是迄はたゞ夫の頸の周りに腕をまきつくるばかりに留めたりしが、今夜は、彼に就て尙ほ多くを知らむの考浮びしかば、更に彼の腕、背等に觸れ試みしに俄然サイケは何物か怪しき物に觸れたるを感じぬ、例へば羽毛の如きものに——されど決して人間の肌にはあらぬなり、彼女は嫌ふべき感覺の全身に亘るを覺えぬ、彼女は一聲高く叫ばんとせしが恐怖の念は却て彼女の唇を鎖さしめ

ぬ、彼女は香を偷んで起上り短剣と燈火とを求めんが爲めに出行きつ。是迄は疑懼の念の中にもわが夫は人間にて、優しく情深くわれかしの希望を挿み居しが、今夜といふ今夜彼は正しく或る恐るべき形の怪物なるべきことを知りたり、サイケは直ちに燈火を點じ刃を手にして寢床に還りぬ、彼女は其寢臺の中には儘かに恐ろしき妖蛇の横はり居るべきを豫想しつ彼女はつふやきぬたゞ一撃にて倒さん爲め願うは急所を一突——されど燈火の光にて彼が眼を覺さぬやう。

激動をもて戦ひつゝ、鋭き刃を齧してたゞ一突と進み寄りしが、見よ、燈火の光は彼女が眼にいと美しき青年の寢姿を映せしめぬ、こはこれ疑もなく愛の神なるエロスにて在りしなり、彼が肩には翼生ひて、例の弓と矢とは傍に横はれり、サイケは喜極て刃を擲ち、燈火を捧げて時めく心を抑へながら尙ほ其美しの姿を眺めんとせし其瞬間、燈火の皿より熱





ケイサ と スイロ

心と愛

したる油滴りてエロヌが右肩を焦したり。

神の中の尤も

美しき神は叫

び出しぬサイ

ケよサイケ

卿は何故に吾

を欺きしか、

われは今直に

卿を見棄てざ

る可らず、吾

は最早敵の計

ばたきしつ、



サイケは出行く夫に縋付きそを抱留めんとせしが、力足ら

謀に對して卿

を保護すると

能はず。

かく云棄て、

エロヌは身を

起し空中に飛

上れり、暫し

は此美しき花

塚に最後の瞥

見を取らむと

して窓前に羽

で其まゝ床上に倒れ伏さんとしそ。エロスは更に引返し来て彼女をかき抱き、地上の青草軟々たるが上に横へつ、さて飛び去て雲の中に姿を隠しぬ。折しも曉の女神ニオスが金紅色の光は其雲の端々を彩りぬ。

### 第八回

哀れなるサイケは失望煩悶の餘り苦痛を免れんとして河に身を投じたり。さるに水の女神は彼女を憫みてその軀を對岸に運び上ぬ。其處には羊飼の神パン笛を吹きすさびつゝ巖の上に坐し居たりしが、美しき乙女のくつをれ居るを見て其方に行き、わが爲し得る事ならば何事にもなし參らせむに、遠慮なく云出で給へといへどサイケはたゞ辭むのみなりしかば、彼は長嘆息して哀れなる乙女や、卿は戀に敗れたりと見ゆ。さらばさばかり力をな落し給ひそ、たゞエロス神の助を祈り給へ、エロス神は必らず卿が祈に耳傾け、卿が秘密の願望を叶はせ給はむ。この神は凡て

戀する者を憫み給へば。

サイケは此忠告を謝し口の中に祈の詞をエロスに捧げながら其處を立出しぬ。山を上り山を下り、巖を踏み崖を攀ち、荆棘を分けつゝひた走りに進みゆく、森の獸、鹿、栗鼠さては空中を翔る鳥共は彼女が爲めに道案内す、遂に遙か山の彼方なる小妻波打てる島地に達せしに、人間の住家彼方此方に點在せると認めたり。此處こそは己が故郷の地なれば彼女は先づわ彼老たる父の宮殿を尋ねしに、父母共既に世に亡き人となり。己れは憫むべき孤兒となりたるを發見せり。さて更に長き憂き旅路の後、脚は傷ましく破れ心も消ゆゝになりて、漸ら一の姉君メガロメナスの住める宮殿に到着しぬ。

サイケは直ちに姉王妃の面前に案内せられて、己が薄命の物語りを一通り聞かせつゝ、「妾は姉上の御指揮に従ひ、鋭き刃もて彼の怪物を殺さん

としたりしに、其時燈火の光に打見やれば、こは如何にわが夫は恐ろしの怪物にはあらで愛の神なるエロスにて在せしなり、されば妻は直ちに燈火を消し刃を棄去りしならむには、尙ほ此不幸は免れ得たらむを、此神の美しき姿に見惚れて暫し恍然たる間に思はずも熱したる油を滴たらし、かば、彼は忽ち目を開き痛く妻を詰りたる上直ちに飛去て再び還り來まざるなり侍り。

メガロメサスは之を聞いて表には甚く悲み嘆きしかど、心の裏にては密かに喜び勇みて思ふ様、エロスの神今やサイケに飽足らで彼女を棄てし上は又他に妻を求め給ふべく、さらばサイケにも劣らず美しくサイケよりも智慮深き此姉こそ必ずその環には漏れざるべしと。

されど此心中の悦喜を制へ付け、彼女は不幸なる妹に機々の間を發しつゝ、エロスが是迄二人の姉達に對するおもわくを探らむと方め、遂にエロ

スは豫め二人の姉が妹に對する隠謀を知り居たるべきを確めさればエロスにして誠にサイケを愛せしならば、斯る破綻を防ぎ得たらむものと、今は疑もなくエロスは新たに妻を求めつゝあらむ、吾こそは如何にもして彼を夫に持たでやあらむと決心しぬ、さてサイケには二の姉君ハヌカニアの許に赴きて助を求むる様にすかしこしらひて出だし立たしつ、直ちに御堂を建立して愛の神に捧げ、日毎に祭壇の前に跪きて己れを第二の妻に撰び給はむと祈りたり、さるにメガロメサスの夫たる老たる國王は之を見て大に嫉妬し、或日彼女が祭壇の前に例の祈を爲し居たるを見て憤怒の餘り物をも云はせず其場に斬り棄てたり、サイケはハヌカニアの爲めに前の如く表はいと親切に迎へられつ、されど此姉も亦密かに一の姉君と同様の望を抱きたり、彼女もエロスの神既にサイケを去りし上は漸に妻を求め給ふべし、さら

ば此れこそは男に否と云はせぬ魔力を有するものと、必ず彼の神が第二の妻となり得べしと考ひ、彼のサイケが記念像の立てる山嶺に赴き、巖を攀ちて身を横へ、エロスの神願くは妻として妻を迎へさせ給へ、御身は妻の抱を疑ひ給ふを要せず、妻は決して御身を欺き奉らず。纏て夕暮の微風彼女の髪の毛を揺かすにぞ、身を起して懸崖の端に立ち上り、吾が爲めに此身を卿の主の許に伴ひ給へかく云放てさきにサイケを訪ひし時爲したりし如く身を空中に躍らせしが、こたひはサイケは來り迎へず、彼女は眞逆まに山嶺より谷底に墜落して微塵となりて死してけり。

こは二人の姉妹が嫉妬と邪心との爲めに自ら死を招きたる天罰の結果なり。

## 第九回

かゝる間にエロスは彼の熱したる油の爲めに肩先を火傷して、云知らぬ苦痛に悩みしかば己が家に歸り寢床の中に横はりしが、發熱を覺えて呻き苦みたり、彼が飛び歸る時偶々一羽の海鰐あり、忍びやかに彼を追跡して、室の窓より覗き込みしに、彼は病床に臥していたく苦みつゝあるを見、急ぎ海上に飛還り、海神ネレヌが娘の一人を介して、此趣をば折しも海中の深みに遊び居たるエロスが母に告げ知らしつ、エロスは病床に横はり居れば定めて不意の事にや出遇ひ給ひけむ、快癒の程も憂取なしなどいふ

アフロサットは遇ふ者毎に己が愛子の事を知れりや否や、彼が火傷は如何にして受けつるなど問ひ尋ねしが、サイケ姫と秘密の戀の結果ぞと聞きし時、憐憫の心は憤怒の念と變じけり、さる事のあり得べきか女神は叫びぬ此のいたづら者が親不孝さよ、われはわが敵サイケの潜越を罰し

叶はぬ戀をもて其身を零落せしむむとこそ命じたれ。さるに其女を己が愛妻となしつる愚かさよ。彼は最早生命の聖母、生物の女王たるわが子たるの資格なし。はたわれより受け継きたる神格を享有するを得ざるべし。

アラロデットは急ぎ我家に還り、激語をもてわが子を詰責しぬ。「汝はいかなる不順不孝の子ぞや。オリンパスの神達將たいかばかり汝を誹謗し給はむ。汝が放縱の時は到る處に喧すしければ、雖て神達もそを聞付け給はむ。彼は母に耻辱を興ふる者なり。彼の愚かなる處女——何辱罵もなき人間の處女に姻を結ぶとは、汝が愚も甚だしく、不撓衝も亦極まれり。扱は汝は母をして其敵を嫁女と呼ばしめても母の心の苦痛は如何ばかりかと推せざるか。思へ我兒、賤むべき地上の一女子が、敢てわれと競争せんと潜上するさへあるに、又汝が妻たらむとはいかにぞや。こは

汝にもわれにも、扱はあらゆる神達にも一大耻辱なり。

汝は此母が汝のサイケと夫婦たらんとするを許し得べしと思へるか、否なわれは汝を罰して、

呼出したわが夫願うは此兒を見張らせ給へ、夢な逃し給ひそ、女神は荒



彼のサイケを冥府の底に墮し、永劫の苦痛を受けしめでは止まじ。怒り猛れる女神は扉を強く打つけ、其の夫ワルカン、ヘーラートス(Vulcan in Hymenaios)を



らかに云放ちつ、好人物の夫を強ひて己れに従はしむるが常なる婦人の如くに、さて直ちに此愚かしき鳥を容るゝに鍔錠付の大なる籠を作り給へ、妻は世の人々に又あらゆる神達に、妻の權勢の容易く委棄せられぬことを知らしめ侍らむ、眞の愛の神はエロスならで妻なるものを、妻は一歩たりとも彼の潜上娘に屈しはせじ、はたわが子なれども此浮薄なる痴者を許しは置かじ。

鍛冶の神なるワルカンは之を聞きて口の中にて何事をか證さぬ、そのけはひ厭々ながらも従はんといふ者の如し、妻の女神は出行かんとせしが此證きを聞きて此方を振向き御身は何をかの給ひし、ワルカンは答へぬオ、何にてもなし、われは只だ此兒がこれよりも善き兒ならむとは初めより思ひ設けざりし、彼はげに放蕩兒なり、此後とても爾あらむ、ワルカンは更に低き聲にて、怒りの中にも美しさは變となき女神の耳に聞え

ぬやうに附加へぬ、彼は爾生れつきたるなり、彼は母の子なるものを、折しも此時デメター、ヘラの二女神入來り厭々ながらも此夫婦争を仲裁せり、されどアフロザットはそを心にも懸けず直ちに事の始終を説聞かし、さて附加て御身等は好き機會にこそ來ましたれ、妻は此怨を報えでは止まじものを、願うは妻を助けて彼のサイケを尋出し嚴罰を加へてたび給へ二人は女神の怒を和めんと試みしが、エロスが果してさばかりの罪を犯したりとは容易に解すること能はざりき、げにや街くも人間の身分としてオリンパスの神と競はんとするは其罪大なれば、サイケは此點に於て嚴罰を受けるに足らじ、されどその罰は償はるべき手段幾らもあるべし、エロスとの戀に關しては何處にか罪あらむ、デメターは詞を續けていふ「彼の乙女は王統の一人ならずや、さらばエロスが好對偶には侍らすや、さてはエロスが此わる事を仕出し、何事も母の女神を模範とする若



者の所爲として少しも怪むに足らじ。林檎の實も一度熟すれば其母樹の下に落ちて遠くへは行かじ。行かじとて誰かそを憤るの理由あらむ。アフロヤジトは之を聞きて幸うして怒を忍び、ツキエの妻天國の女王たるヘラに向て助言を乞ひぬ。ヘラはデメターと見る所を異にしつ。されどアフロヤジトの説にも同じ難かりけり。ヘラはエロスの所爲を辨議する口實を有せず。されどサイケの爲めには十分の口實を有したり。人間にしてオリンパスの神達の中に列せらるゝを得たる者數多あるにあらずや。天國の女王たる妻さへ現にヘラクレスをして神たらしめたり。而かも彼は妻が敵たる人間の女子の子なりき。されど妻は彼が神たるの價値ありと信じしかば、喜んで彼を迎へ、手つから神酒の盞を與へて不朽の生命を彼が五躰に賦與したり。加之永久に若き女神なるわが娘ヘーベは彼が妻となれり。さて彼は永久に人間界の好模範たるべし。



第十回  
サイケは淋しき一人旅を續けて彼方此方と彷徨ひつゝ、夜も盡も憩ふとなしにエロスの跡を尋ねたり。彼女は夫を慕ふ赤心を示して再び夫に愛せられむと力むるなるが、若し夫も叶はずば、せめては婢女ともなりて彼が身邊に役せられむと決心したるなり。  
とある街道に差掛りつる時、サイケは或山の頂にいとたふとき祠を見て叫びぬ。あゝ彼の祠がわが夫の住家にてわれかし建築の美、圓柱の壯大に目を引かれて、彼女は直ちに祠の入口に向て進み近きぬ。  
祭壇の前には小麦の穂にて作りたる花環を供へ、その周圍には同じく小麦を束ねたるが散亂せり、其の他收穫に用ふる器具鎌など、一日の勞働に疲れたる農夫の手より譯もなく投出されつとおぼしく、亂雑に横はれり。サイケは直ちに此等の物品を順序よく排列しつゝ、心の中にて妻は神

達の祠を忍にすべからず。又は神達に事ふるの禮を怠るべからず。かくてぞ妾は神達の慈悲を得。わが過失を宥され侍るべき。」

こはデメター女神の祠なりき。女神はサイクがかく恭しく祠内を清めつゝあるを見をなはして、わがサイク、汝は何を爲さんとすなるか、ウヰーナス、アフロザットは汝を追跡して、怒を汝に報いんとしつゝあり、さるに汝は己れの身の危険をも考へず、此堂内におりてわが祭壇を清めつゝあるよ。」

サイクは神前に跪きていとしき夫に廻り遭はせてたばせ給へと祈りつゝ、世の中のあらゆる神、あらゆる魔、あらゆる善き事あらゆる悪き事に誓て、妾は此哀れなるサイクを救ひ、おはれの者よと思召させ給へと祈り侍る。願くは唯數日が間妾を此麥束の中にかくまはせ給へ、故なくして妾を求め給ふウヰーナス女神の御怒解け。若しくは少しにて和らぎ給

ふ迄妾を茲にあらせ給へ、妾は長き旅にて疲れ果てたる身に侍り、脚は傷れ精神は盡きんとし侍るに、尙ほ氣力を養うて夫の探求を續けんとする身に侍り。」

さはれ此收穫の女神デメターは乙女の懇願の爲めに動かさるゝとなかりき。女神はサイクをして起立せしめて告るやう、われは喜んで汝を助けたしと思へどわが力足らざるを奈何せむ、われは汝を助け能はざるに、却てウヰーナス女神の怒を招くのみならむ、われは實に天上の掟に由て汝を捕ひ、怒れる女神に引渡すべし定められ居るなり、されば今わが汝をして何事もなく此處を立去らしむるは、天の掟を破りての所業なり。」

かく云終てデメター神は内陳深く隠れ給ふにサイクは泣くゝ祠を立去りつ、今やサイクが苦痛は二倍しぬ、いとしき夫に廻り逢はむとするの念に加ふるに、いとも勢猛なる女神の一本柱なるアフロザットの怒を恐る

の念を以しぬ、しかも彼女は此世の中に助力を乞ひ保護を受くべき人の一人をも有せざるなり。

彼女は山を下りぬ、間もなく貴けなる森の高き樹立の中に更に宏壯なる建築の一堂を見出しぬ、此堂はあらゆる神達并に人間の大父ツオイスの妻、天國の女王たるヘラの祠なりき、此女神は妻たる者母たる者の保護神をもて目せらるゝ神なれば、必定善き教へを授け給はむと思ひて、サイクは祠前に進入りしに、貴き供物さては願望の筋を記したる錦繡の衣服など四邊に懸垂せり、彼女は跪きて祭壇をかき抱きつゝ祈るやう、オ全世界を支配し給ふ大父ツオイスの妃、神達の聖母と仰がるゝ御方、獅子の曳く車を驅て天翔り給ふオリンパスの女王、サモスの島さてはイナカス河の岸なるアルプスの城市に宮柱太しきませる神、聖き婚姻を保護せさせ給ふ女神、仰ぎ願くは妻が祈りに御耳傾けさせ、妻があぢきなき

身の上をおはれとも思させ給へ。

女神は直ちにサイクの目前にありくと出現し給ひつ、いとおどろかざる態度もて云出るやうわれ若しわが子の如くに愛で慈しめる養女、アッロヤットの願を棄てし省みざることを得ば喜んで汝が祈りを聴かむ、されど今は詮なし、われはたゞ運命が汝を過度に苦めざらむことを、はた汝が艱難の後に幸福を得んことを冀ふのみ、されど今われは汝を奈何ともすべからず、汝が命數のまゝに汝を棄て置くの外に道なし、何事も能く忍びて誠實なれ、さらばいつかは自ら己れの救脱を企うするを得む。

サイクは今は全く失望落膽して、擁護を求むるの念さては身の安全を圖らむとするの念を抛棄しつ、さて益くやう、妻はアッロヤット神の怒を脱るゝこと能はず、さらば喜んで従順に、彼の女神が妻の身の上に課し給はんずる神罰を受けむに若かじ、たとひ世界中を探し歩くとも一度失ひ

たるわが夫に再び廻り合はむとも思はれぬに、母君の御許に参らば却て再會の機もなからずやは、妾は心を決して大膽にわが敵わが追求者の許に赴かむ、げに彼女神は妾を甚く憎ませ給へり、さばれ同時に女神は妾が限り知られぬ誠をもて戀ひ慕へる彼君の御母にてはおはさずや、こは或は妾が身の破滅にてあるべし、されど一條の希望も残れるものを、命數の定まれるにしあらば妾は隠せずして死に就くべし、負傷の鹿の如くに討ち取られむよりは、自ら進んで神の祭壇に犠牲とし斃るゝこそ善けれ。

## 第十一回

フロヤットは希臘并に其他の國々の市とも残る隈なく尋ね廻りけれども、遂にサイクを見出すとなかりければ、一先づ天上の住家に還らせ給ふ、其時召させ給ひし鹽車は、夫の神ウルク、ヘラートスが純金をもて具

殼の形に模して鍛ひたるを婚禮の御時贈物として贈らせ給ひたる、いとも巧妙精緻のものとぞ聞えし、女神が天上の御住家なる檐端に巢を作れる家鳩の中の四羽ぞ、いと易々と輕らかにそを曳き牽りける、さて鹽車は恰も薔薇色の片雲の如くおそそかに空中を過ぎりけるに噪がしき雀の群はその周圍に羽たゝさしつゝ、囀り廻りて女神の還御を警蹕するもの如くなりき。

一道の靨氣眼前に繰廻して、やがてオリンパス山の巔に達しければ、フロヤットは霹靂の神にして守宙の支配者なるツオイス神の玉座に近く進み行きつ、いとおそそかに敬禮して天國の飛脚なるヘルムスを暫し御貸わらせ給へと奏するに、ツオイス神は直ちに諾ひ給ひて、ヘルムスを召寄せらる、ヘルムスは此美しき女神の前に額つきて依頼の旨を承り、畏まりて早速翼附の履を穿ち、下界に急ぎ降らんす準備をなせり。

アフロサットは純金の轡車の中にヘルムスを招じて、例の媚言を弄しつゝいへるやう、「わが親愛なる君よ、御身も知る如く妾は何事も御身に謀りて爲すが常なるが、こたびは特に憐れむるに有て御身が助力を乞侍るなり、もは人間の一少女妾と美を競はんとする者現れ出でたり、人間にしてかゝる潜越の行ある上は彼女が命は妾が思ふまゝなるべく、妾は彼女を奴隸として驅使するを得べし、さるに彼女は潜み隠れて出でず、妾が力にては自ら尋ね求むるに能はず、されば妾は今布令を廻し逮捕状を發せんとするなり」かく云ひつゝアフロサットはサイケの名と人相書とを記せる一枚の紙を飛脚神に手渡して、さて首尾克く彼女を捕來らば報酬はかく／＼と告げ知らしけり。

されば此計畫は今無用の物となり了りぬ、女神が天國に若御ありける間もなく、サイケは女神が住家なる宮殿の門口に現れてわれとわが身を敵

の掌中に引渡したれば、

アフロサットが召使の一人、名をフハツシヨンと呼べるは出で、サイケを見て叫びぬ、あゝ汝賣女、汝はわが主の君の求めさせ給ふ女なり。

フハツシヨンは驚く乙女を襟髪攫んで引立てつゝ、アフロサットの御前に引摺行けば、女神はいとも苦々しげにサイケに向ひ、御身は遂に始を拜せんと來りしよな、われは思ふわが美しの乙女よ、御身たとへ自ら出で來らずとも、われは御身の隠家を見出すを得しならむ、されど今かく自ら出で來りたる心根に免じて幾分の斟酌は與ふべし。

第十二回

サイケは恭しく女神に仕へて如何ならむ命令にも必ず背くまじきことを誓て云ひぬ、願うは妾を御吟味の上、侍女として用ゐさせ給へ、たゞ此身を免はれと思して御惡しみを免させ給へ。

アフロヤットは「さらば汝が如何なる事を爲し得るかを見んと答へながらサイケを穀倉の中に伴ひ行き、麥、稷、粟其他様々の穀物を集めてを混合せしめたるを山の如くに積上げ、さて輕蔑の口調をもて「汝が忍耐と技能とを試みむ、先つ一粒毎に此穀物を振り分けよ、さて此仕事今夕迄に終らすばわれは汝をわが召使アンサイナー(憂慮奴并にサウロ)に渡して殿しくさいなましむべし、かくて女神は途方にくれたる乙女を一人穀倉の中に閉籠めて立去れり。

サイケは悲しさ遣る方なく失望の餘り詞もなしに此穀粒の山を眺めて立ちたり、いかにはせむとたゞ茫然たる折しも小さな蟻一ツ出で来りて哀れなる乙女の窮迫を憐み、且つこの乙女は神達の中の一柱の對偶なることを知れば、數知れぬ己が同類に此由を告げて早速此場に駆付けしめぬ、數萬の蟻は見る／＼集り来りて穀粒を振り分けそめしが間もなく仕事は

終りたり。

アフロヤットは黄昏に還り來ましぬ、何處にてか婚姻の酒宴に迷りしとおぼしく、醉顔艶やかに薔薇の花をかざして美しさ輝くばかりに見えしが仕事の既に終りたるを見て叫びぬ、こは汝自身の手にて爲したる業にはあらじ、他の助を借らで汝が爲し得たりとは思ひも寄らぬ事なり、されどよし、われは汝に他の仕事を與ふべし、粗悪なる麵包の一片と泉の水の一瓶とは女神がわが子の美しき花嫁に與へたる唯一の食物なりき、さて女神は呆れたるサイケを一人寒倉の中に遺して出行きぬ。

翌朝アフロヤットは再び現れ出て、例の和げ難き憎しみの念を飽く迄示したる上、彼方の森を指して、「汝は彼の小河の向ひに森を見るならむ、急ぎ彼處に行け、さらば汝は彼處に貴金色したる毛を有する羊の群の草

葉を食ひつゝあるを見出さむ。おれは其毛の一束を要するなり。汝早く往いてわが爲にそを取來れ。されど注意せよ其羊は猛惡なり。汝が近寄るを見ば汝を衝きて死に至らしむることあらむ。

サイケは小川を差して出往きつ。されどそは女神の仰せに遊み奉らむの心よりは、寧ろ羊の角に懸けられ若くは河の淵に陥りてわが身を失はんとの念に驅られてなりき。されど小川の岸に到りし時、音樂の母なる蘆の女神は笛の音の如き聲をもて呼びかけぬ。「オ、サイケ、川の水をば汝の墳墓となして汚すとなかれ、又森に彷徨ふ羊の群に近くとなかれ、羊は猛惡なれば汝を殺しもやせむ。汝若しわが忠告に従はんとならば蔭多き楡の木の下に横て待て、太陽中天を過ぎて地平線上に近く時、荆棘の間を分けて彼の羊群の過ぎし處に往け。さらば汝は少しの危険もなく荆棘の中より彼の金色の羊毛を集むるを得なむ。

サイケは神女の訓誡に従ひ、容易く羊毛を採集して歸り行きしに、アフロサットは驚いて彼女を見詰り、如何にして汝は死を免れ如何にして此金色毛を得來りしぞ。サイケは事の始終を陳述するに女神は答へて、さればこそ、こは汝の知恵にはあらじと思ひたれ。さらばわれは又汝が思慮と勇氣とを試みるに足る第三の仕事と與ふへし。サイケは何事をか云出で給ふらむと氣遣はしげに見上げたり、女神は詞を繼ぎ、こゝに水晶の水瓶あり汝は之を執て彼處の山に登れ、汝は荒れたる淋しき野原の中にコキヌ河の逆巻き流るゝを見む。此河は彼山の懸崖絶壁の間より流れ出て、底は知られぬ九泉の下に注ぎ去るなり。汝は其源泉の水を酌み來れ、さてわれは汝がわが子エロスが妻たるの價値あるや否やを見む。

サイケは水晶の瓶を執てコキヌの源泉へと急ぎ往きたり。されど逆巻く水の溢れ出る處は巖險くして近く可ら可、加ふるに懸崖の間隙には恐



しき毒龍潜み居て齒を鳴らし顔を開きて一呑に呑まむとするの氣勢を示すあり、サイケは恐ろしさに泣き出し湧出る涙抑ふべくもわらざりしに、卒爾として大きな鳥一羽天より飛下て彼女が前に来れり、こはツオイス神のつかはしめなる猛鷲なりき、暫しはサイケの傍に羽たゝさしつゝ、新らしき勇氣を興へんと力めたり、件の鷲は嘗てツオイスの玉座に彼の美少年ガニメードを捕へ登りし時エロスの助力を受けつることを想起しかば、今エロスの妻がかく窮厄に陥りつゝあるを救うて昔日の恩に報ねんとはするなりき。

鷲はサイケに向て、オ、優しの乙女や、御身は深淵の中に巻込るゝともなく、彼の靈水を一滴なりとも酌み取り得らるべしと思へるか、たゞ酌取らむと試むるだけにて御身は必ず死するならむ、されど其瓶をわれに賜へ、われは御身の爲めに酌取りて參らせむ。

かくて、ツオイスのつかはしめなる靈鷲は其爪に瓶を掲げ、激流の上へ飛び往きて悪龍毒蛇の攻撃の甚さなかに、衝き来る波浪の中に瓶を差込みて溢るゝばかりに酌取りつ、サイケは喜びて瓶水を請取りて急ぎアラザットの許に立還りしが、女神の怒はサイケの成効



に由て和らげらるゝとなく却て益す激烈なるに至りぬ、  
「汝は思ひも懸けず又々仕遂げしよな、汝は不思議を働く魔女にはあらずや、されどかく事もなくわが怒を免れ得べしと思ふとなかれ、こゝに汝

を試むるに尙ほ一事あり、恐くはこれ汝が最後の試みならむ

### 第十三回

アフロザットはサイケに課したる三つの仕事の容易く成されたるを見、焦つて騒ぐやう、われは更に断然たる方を執て速に此形を付け彼愚かしき者をして死せざるを得ざらしめむ、さて象徴したる黄金製の小さな瓶を取出してサイケに渡し、これを携へて黄泉の國に往き亡者の支配者アルトールと叫ぶるゝ地下の王の王妃ヘルセフオーンに手渡しせよ、さて王妃に告るにわれは不老泉の飛沫を賜はらむことを切望する旨を以てし、七日間に失ひたる美しさを恢復するに足る程の水を乞ひ來れ、われはわが子エロスの病床に侍したるが爲めさばかりの美を失ひたるなり、急ぎ往け、われは汝が長の旅路に恙なからんと祈る、さてその寶水を得たる上は速に登り來れ更に一段低き聲にて、一度行きし者の還り來し例なき彼國より

若し歸るを得るならば。

サイケはあらゆる望を失ひぬ、一度冥府に降り行きし者は、再び日の光を見ると能はじとは兼て知れり、されど彼女は尙ほ喜んで此命令に従はんとし、とある高塔に登り其處より飛び下らば忽ち黄泉の地に到らむこと必せりと思ひ決めたり。

さるに行きくゞて塔下に達せし時件の塔はサイケを喚應け、「おはれなる乙女よ、汝は何故に己が身を殺さんとするか、はた忍耐と勇氣とを爾く要する此危急の場合に、何故にさばかり沮喪してあるぞ、汝若し身を投げなばげに冥府の國には到り得べし、されど再び日の世界に歸來らむ機會をば失ひなん。

サイケは塔の入口に坐して云ひぬ、わゝ妾は如何すべき、死より外に道なきものぞ。



塔は答ふ、誓ひ起て開き給へ。ラセフモンに近き山中の狹間に一の洞穴あり、地下の世界の呼吸穴として知られたり、其穴の奥に未だ曾て踏まれたることなき大路ありて冥府の王宮に通すべし、されど黄泉の國は徒手にて過ぐべからず、大麥にて作りたる麵包を蜂蜜に漬けたるを携ひ二個の貨幣を口に噛みて往くべし、往くと少許にして薪を積みたる跛足の驢を跛足の馬子の曳き來るに出過ふべし、馬子は其時薪の落ちたるを縛し付けんが爲めに紐を呉れよと乞ふならむ、されどたい口をつくみ知らざる爲して通り過ぎよ、こは彼國の支配者が旅人を引留め再び還らざらしめんが爲めの謀なり、行きくして此度は亡者の川に到着せば、其處にては渡守のターロンに渡錢を拂うて渡るべし、死の郷にても變りなきは慥なれば錢なくては渡し呉れぬものと知れ、其渡錢にはターロンをして自ら汝の口中に噛める貨幣の一個を取出さしむべし、さて残れる一個は汝



が歸路の用に供へよ、又船の川を過る間老人の死體一個水面に浮び出で、手を舉げて船中に救ひ上げ呉るし様懇請せん、されどそれも亦汝を彼世の事にかゝつらはしめん工みなるぞかし、夢憐憫の情に打たるしとなくたゞ黙して過れよ、河の彼方に着せば、暫して三人の老女の機を織りつつあるが、汝を見て手を貸し給へと乞ふに遭はん、されど汝の手を其織物に觸るしは宜しからず、たい知らざる爲して往け、これ等並に此外數多くの怪物は皆汝を陥れんが爲めの係蹄なり、汝若し彼等を助けむとして手を舉げなば、汝は蜜漬の麵包を失ふべく、さては再び日の光を見ると能はざるに至るべし、愈よヘルセフオンの居城に到着せば、其處の入口に一軀三頭の大なる猛犬ありて汝に吠えかゝらむ、其時汝は蜜漬の麵包を與へて彼を鎮め易々と通過することを得む、さて門を入れれば直ちにヘルセフオーンに面謁を許さるべく鄭重なる待遇を受るならむ、尙ほ汝

は立派なる饗應の席に會食を請せらるべし。されど凡ての饗應を辭して背て飲食することなかれ、汝若し冥府の食物を一塊なりとも口にせば汝は永久彼處に停らざるべからず、汝はたゞメルセフォーンに乞ふに普通の小麦の麵包の一片を以てせよ、さらば彼女は汝に與ふべく、汝はそを食ふを得べし、食終らば乃ち瓶を捧げてアフロヤットへの贈物を乞受け、直ちに此世に還り來るべし、汝は再び例の麵包を犬に與へ、殘る一箇の貨幣を渡守に拂うて川を渡り、彼の洞穴指して急ぎ來らば、やがて入口に達して天上の星の光汝を歓迎するを得む、さればわが特に汝に誠め置くべきは、汝が手にせる秘密の瓶に注意を忘ること勿れとの一事なり、汝は夢を聞くことなかれ、夢を熟視することなかれ、夢其中にある寶物を知らむと試むること勿れ。

サイケはラセデモンに赴き山の狭間に果して洞穴を見出したる、さて二

箇の貨幣と蜜漬の小麦麵包とを得て冥府に通ずる大路に進み入りつ、跋足の馬子が曳ける跋足の騾をやり過し、渡守に渡錢を取らしめ、浮べる死牀の哀願に耳を塞ぎ、白髮の機女を省みず、蜜漬の麵包を猛犬に賂ひさて冥府の王宮に入りぬ、メルセフォーンは威風凛々たる夫の王と相並んで坐し、サイケを引見して使命の趣を聞きその願を許せり、尙ほ此冥府の女神は己れ自身の悲しき運命を想出で、サイケを憫み、食堂に請じて饗應しぬ、されどサイケはそを辭し小麦の麵包を乞うて食せり、やがて例の贈物を金瓶に受けて、もと來し路に引還しつ、再び猛犬の願に麵包を投入れ、口中に尙ほ殘れる一箇の貨幣を渡守に與へ漸う冥府の地を免れ出で、翌る朝早く此世に還來りし時は、空にはまだ星影の閃めき居たりき。

思ひの外にもかゝる危險を免れしものから、まのあたり目撃したる恐ろ

しの光景を想ひ浮べつゝありしが、サイケは金瓶の中に含まるゝ秘密に思至り、「げに妾は愚なるかな、妾は今美の精なる不老泉の水滴をわが掌中に握れるならずや、さるにそを妾を憎み妾が身の破滅を計る一婦人の手に渡さんとして急ぎついあるよ、妾は瓶を開きて靈水をわが物となすに能はざるか、さて妾は之に由て容を美にするを得ば、これ長へにわが夫をして妾を愛せしむる尤も強き縁の糸にわらざるか。」

かく云終てサイケは瓶の蓋を取りたり、激しき臭氣ある煙は朦朧として立上れり、これは美の精にはあらで、メナツクスノ水が含むてよ、長眠と忘却にてありけり、サイケは忽ち此氣に當てられて地上にはたと倒れ臥しけるに混沌の濃き雲その身邊を鎖し了んぬ。

## 第十四回

かゝる間にエロスは傷も漸う癒えぬ、或日一羽の蝶窓より飛込み来りし

が、サイケが艱難の状を具さに告げ知らしたり、今は力も付き氣も軽らかになりし所なれば、忽ち張番のワルカンを欺き窓より室外に脱れ出で戀の翼を伸して下界遙かに舞下り、彼の冥府に通ずる洞穴の入口にぞ立ちたりける、見れば、サイケは身動きもせず地上に横りて、恰も眠れる屍の如し、エロスは獨ごちぬ愛しき乙女の眼が死に變らぬ前にわが到着したるこそ幸運なれ。」

かく云ひながらサイケの臉より冥府の眼を拂ひ、周圍を鎖せる妖雲を再び瓶中に閉籠めぬ、さて一筋の矢を取りその尖端をもてサイケに觸れて喚覺しぬおはれなる少女や、汝は又も好奇心の犠牲となりしよな、知らずや不老泉とは忘却と長眠との河なるレーセの水をもて灌えられたる泉なるを、たゞ天の神のみ其水に觸れて害せられざるを得べし、哀れなる人の子は、若返らんとして此忘却の水を味ふも、そは死と生との關門を

経たる後ならざる可らざるぞ。

サイケはエロスが接吻を感じて眼を開けば、思ひきやいとしき夫は氣遣はしげにわが身を覗き居て嬉しげに微笑しつゝ、「今は漸う悟りつらむ。卿が好奇心は如何に御身が爲に不幸なりけむぞ。いで此瓶をば早くわが母アフロヤットの許へもたらし給へ、さて卿がわが母の命に隨従しつゝあらむ間餘は何事もわが宜き様に取斗はむ。」

かくてエロスは一先つ美しき花嫁に眼を告げ、大父ツオイス神に謁見せんとして、直ちにオリンパス差して飛び去りぬ。

いとしき神の虚空遙かに天翔るを見し時、サイケが眼には涙充ちたり。わが夫は再び還り来ますべきか、今も尙ほ妻を愛し給ふなるべきか、久しき間の難業苦業は妻の美を傷けはせざりしか、流るゝとしも見えわかぬまでいと静かなる小川の岸に坐して、彼女は其顔ばせを水鏡に照し見

たり、見よ彼女が胸は悦びをもて躍りたり、昔日の美は今に變らざるのみならず尙ほ一段の姿容を増したるなり、彼女が齡の熟したる丈彼女が美しさも熟したりとおぼしく、以前に優る濃艶の情その顔ばせに溢れたり、云ひ知らぬ幸福の感全身に満ちて、今は氣も心も輕々と我も空中に飛揚し得るが如きを覺えつ、身うちはいつしか他し形に變じて肩の上には小さき蝴蝶の翅の虹色したるやうなるがありくと生ひ出でたり。

さて神達の太父ツオイスはエロスの訪來れるを懇ろに待遇し、かく云ひつゝ接吻しぬ、卿はげに神達の中にて、オリンパスの王なる此われを蔑にする者の隨一なり、またやしもすれば下界に事を惹起し累をわれに及ぼして省みず、されどわれは甚だ卿懐しく、はたわが手つから卿を育みし事を思へば、われは喜んで卿が願を聴さむ。

祖父が孫に對する寛容の微笑をもて、大ツオイスは直に例のオリンパス

の飛脚へエロスに命じ、あらゆる神達の會議を召集せしめたり。大命をおろそかにするは嚴罰の掛る所なれば、會議室は間もなく議員をもて充たされぬ。ウキーナス、アフロディットは鳩に曳かせし貝殻形の盤車に乗て到着せしが、其時わが子エロスの下界に飛下らむとするに遇ひぬ。エロスは苦々しき尤ひる如き調子にて「母上」と呼懸つ。されど其美しき聲の中は、さすがに詫ぶるが如き口調も交りたり。母上、サイクとの結婚を何時迄も御許しなくば、此身は神位を抛て、オリンパスを去りサイクと共に何處の鄙にも落ち行かんと思ひ決め侍るなり。彼女と共におらはサイクラスの靈地も尙は天上の住家に優り侍り。かく云終て下り往くエロスの後姿を見送り、女神は頭を振りつく獨言ちぬ「お、彼ははや正氣にあらじ、今若しわが一步を譲らずば、恐らくは意外の事あらむ」。

エロスは下界に降りて、待ち焦れたるサイクに再會し、例の接吻の後サイクの語るを聞けば、彼女は瓶を女神の許にもたらせしに、女神は瓶の一度開ふ。



かれ、爲めに靈水は其効力を失ひたるが故に、この仕事は正しく爲されたるにあらずとて、痛く憤りの氣はひにて、彼女を追拂はせ給ひしなりといふ。

「母上の無慈悲をば心にな懸け給ひそ、祖父大ツオイヌは力強きわが味方にならせられたり、いでわれと共に、オリンパスに行き、あらゆる神達の司が玉座の前にて、如何にわれ等が運命の決せらるしかを見む。」



サイケはエロスの肩に倚り掛れば、エロスはサイケの腰を擁し、聖き歡喜の翼に乗て相共に天上遙かに舞上れり。

此時天の王なる大ツオイヌ

は玉座に在て、神集ひに集ひたる神達に告るやう漏なく茲に集ひたるオリンパスの神達、神達は衆て、神達の中の尤も年若き、されど下界の生存の樞機を司るエロスが軽々しき性質を能く知らむ、われは彼が多血多感の氣象に、勸を懸るの必要あるを思ふ、さればわが思ふに彼の爲めに、又神達の爲めに、はた全世界の平和の爲めに、彼をして結婚生活の責任を負はしむるは最上の策ならむ、彼若し妻あらば世帯の煩累は彼をして若實温和ならしむべし。

ツオイヌは更にアフロディテを顧みざるに彼は、自ら早くも己れの欲する乙女と云替はしたれば、われ等は彼等の結婚を承諾し、その新婦を吾等の一員としてオリンパスに入らしめなむ、たゞエロスの母は仔細あつて、エロスの振舞を喜ばぬ事あらむ、されど彼サイケは人間の乙女ながらエロスが愛を受け神達の中に列するの價値あることを證明したれば、今は怨





を棄てし彼女に優しからむことをわれは悔むるぞかし。

アフロザットは初め唇を尖らし、故障を申立てんとしたりしが、大ツオ  
イヌはかくと悟りて、怒りの顔色物凄きに、遂に一步を譲りてサイケは  
わが子の妻たるに足る旨を承認せり、ツオイヌの顔は再び輝き、集へる  
神達は彼がはからひを欣びつ、アポロはこれより直ちにオリンパスの食  
堂にて新夫婦の婚姻を祝せんと發議し、パツカスはそを賛成しぬ、さて  
愈よ其準備に取掛らんとせし時、エロスはサイケを伴ふて參若しぬ、神  
達は何れも此新婦を歓迎し、ツオイヌは手づから神酒の一盞を賜ひて不  
朽てふ天福を授けたり。

神達は順を正して饗應の席に着きぬ、エロスはサイケはツオイヌに接近  
して着席し、茲に初めて正しくおごそかに永久の契を固めたり、ガニ  
ードは大ツオイヌの聲を辨げて侍し、パツカスはあらゆる神達に無盡蔵



の酒を給しぬ。

宴果てし後も真夜  
中頃まで遊樂は續  
けられつ、季節の  
神達は蔷薇色の光  
を四邊に撒布し、  
アポロは唄ひ且つ  
琴を弾せり、  
イヌの神達は壯大  
なる音楽の調べを  
なし、アフロザット

女の兒を設くるに至りて彼女が幸福は足らぬ所なきに至れり、件の女



は神達の前に舞踊  
し、意外にも俄に  
新婦に優しくなり  
初めつ、又サイケ  
スは笛を吹きたり、  
かくてサイケがわ  
づらひは長へに了  
れり、定めの日日  
に美しく輝くやう  
なるいと恰柄しき

見は微笑む時眼の光さながら日の光の如し。兩親は之に名つけて「ヨロイ」喜びと呼びなしたつ。

其後神達の中には誰あつてサイケが天國に迎取られしを悔やしと思ふ神あらざりき。ウーナス、アフロザット將たそをふさはしからずと思ふべき理由を見出し能はざりし。程もなきにサイケは恰かも永劫の昔よりオリンパスの一員たりし者の如くに、何一つ神らしからぬ所なきに至れり。されば彼女が美しき顔ばせの暫しにても見ぬ折には、神達は皆そを口惜しとおぼし給ふ程にて、彼女が来りし以來天國は以前よりも輝やかしうなり優りたり。

下界の住民は人間の乙女子がかく上天したるを榮として悦び合へり。サイケあつて初めて人間の精神は神達の中に列するをわからさまに承認せられたり。かく人間は神となり、神は其人情に富めることを示して以來

人間は益す人情深く、神は益す神々しく見ゆるには至りたり。人間の精神は軀軀を離れて彷徨ひ出るとあらむ。されど精神にして其理想を固守し、あらゆる誘惑あらゆる運命の裡に撓むとなく、地獄の苛責をも死の脅迫の下をも恐るゝとなくんば、遂には再び生存の道を見出し得べし。而してそは必ず愛の裏に見出し得べし。

愛は天地を動かす。引力としては日月星辰の運動を調和し、親和力としては原子と結付て萬物を造成す。されど愛はたゞ人間の精神と結付いて初めて完全の域に達す。そはさてこそ愛は初めて自覺を得已れの性質を知るを得るなれば、されば人間の精神の中に在ては、愛は渴望、苦悶、別離と相並立す。愛は様々の艱難辛苦を経形を更へて初めて幸福を得已れを樂てし初めて満足を得。已れの軀を献げて初めて再生を得。死に由て初めて不朽を得む。

「死は人生の問題なり、されど愛は其解釋なり。」

小説  
愛と心

小説に就ての愛と心

「愛と心」の小説に就て

元良 勇次郎

余此頃「愛と心」の小説を讀みて感ずる所あり戸澤氏に請ふて之れを邦語に直し世人に紹介したり、其小説の主意は已に讀者の承知せらるゝ如く愛は男性にして神なり、心は女性にして人の心を現はしたるものなり、若し人の心に於て愛と聯合することなからんか人心常に冷にして些細なる規則に拘泥し、せめたし女神の爲せる如く或は又へら女神のなせる如く眼前哀むべき事情あるも規則に拘泥するが故に其救済を斷行する能はず、社會は冷なる規則を以て覆れ常に其活動に於て圓滑を欠くの嫌あり、然るに一度愛と心との婚姻成就したるに於ては欣喜快樂を

以て人心を充たし社會は暗黒より光に出でたるの感を生ずるには以上小説の終りに於て之を見るべく、是れ最も能く人情を云ひ現はしたるか如し。

以上は紀元後五世紀の頃に於て歐洲の事情を云ひ現はしたるものなりと雖も今翻て我國の事情に照し考ふるに、我國果してでめた一の如き思想を有するものなまか、果してへらの如き思想を有するものなまか、些細なる規則に拘泥し其事情の如何なるに關せず冷なる心を以て之に對し哀むべき者あるも器械的に之れを取扱ふものなまか、余不幸にして斯くの如き列世上少からざるを信するものなり、然りと雖も之れ社會發達上經過すべき段階にして敢て之れを咎むるには非すと雖も冷なる正義の觀念或は

器械的の規律の上に尙ほ高尚なる道德心即ち愛情のあるべきを悟り、又社會の事情器械的の道德を去り出て暖なる自然の人情に基ける高等道德の必要を告げつゝあるを悟るに於ては速に舊思想を脱し新思想に移るべきを主張せんとするものなり。

抑人の性情を考ふるに系統發生 (Phylogeny) 及び個體發生 (Ontogeny) の別あり、系統發生とは或は之を種族發生とも云ふも妨なく數百年の間に遺傳的に發生する所の種族上の進化にして、個體發生とは吾人母の胎内に宿り夫れより一個人の生涯中に生ずる所の進化を云ふものなり、古來多くは個體發生の事に注意したりと雖も未だ系統發生のことは倫理上其研究幼稚の状態にありき、故に今之

れを日本在來の儒教に就て正さんか個人の性情は教育により之れを矯正すべきを論じたるもの多しと雖も系統的發生に至りては一言の未だ之れに及ぶものなきを以て知るべし。然るに現今の生物學上の法則より之れを見るに系統發生と個體發生とは大體同規則に従ふものにして絶えず外界の境遇に順應して發達するものなり。故に若し外界の境遇にして其當を得たるものなりとせんか、精神は順境に立ちて發達するが故に精神の状態も又順當なるものなりと雖も其境遇にして當を得ざるものなりとせんか、即ち逆境に立て發達するものなるが故に精神活動上種々の偶然的且つ不必要なる要素之れに混入し、精神複雑に進むと雖も複雑なる割合には順當の發達をなすを

得ざるものなり斯くの如き場合には此等混入したる要素の爲めに人性の天真とも云ふべき美性の發達を妨害され變態の發達をなすに至るべし。今之れを實際の歴史に徴するに古代地球上人類の數少く天然の賜多き時代に於ては人性自ら順當の發達をなしたりと雖も其後生存競争盛なるに及び種々逆境に立ち爲めに順當の發達を妨害されたること明なり。從て倫理思想も亦系統發生上種々變態を生ずるに至れり斯くの如き事情なるが故に倫理思想は社會發達の事情と共に變遷せざるの止むを得ざるに至れり。今若し之れを常道と權道との區別に當て論ずるときは常道は常に變らざるものにして權道は場合により變遷すべきものなり。而して社會の

事情逆境多く随て常道少くして權道其大部分を占むるに至れるが故に世人倫理思想の變遷すべきものなるを認むるに至りたるなりと雖も素より常道の萬古不易なることは世人の夙に認むる所なり、以下論せんとする所は其兩者の關係に就き讀者の注意を引かんとするものなり。

古代の倫理思想に就て

社會の未だ複雑ならざる古代に在つては人心自ら淡泊なると同時に地球上の人類の數も多からず、従つて人心自ら裕かにして所謂黃金時代に近き状態なりし事は各國の歴史上に於て認むる所なり、想ふに此時代に於ては倫理思想も亦淡泊にして所謂常道の如きもの行はれ易き状態に在りしならんと信ず、然るに人類の數益々繁殖し加之

各個人の欲望大に増加するに於ては所謂生存競争益々激しくなり、常道の行はれ難きは勿論甚しきに於ては下等動物に於ても有まじき状態を現はすに至りたるものなり、然るに斯の如きは固より人生の固有性にあらず、唯外部の事情の強迫に依りて已むを得ず生じたる變態に過ぎざる事なれば多くの人類中には所謂天才出で、人生の固有性に基き倫理道德を説くに至りたるなり、然りと雖も其道德思想と雖も未だ發達したりと云ふ能はず、唯相互の生存競争上に於て大なる不都合を防禦するに過ぎざるものなれば所謂正義の觀念に基きたる道德、先づ社會を支配するに至りたるなり、正義の觀念とは各個人の行狀に従つて或は之を罰し、或は之れに褒賞を與ふるの類にし

て所謂善人は善の報ひを受け、悪人は悪の報ひを受くるの類に止まるなり、此正義の觀念は一方に於ては所謂國法となつて社會組織の根本となり、他の一方に於ては倫理思想として社會の風俗を律するに至れり。

古代の倫理思想の革命に就て

古代の思想は大凡斯の如き者なりし事は之を印度のブラマ教に質し、或は又猶太教の趣意に質し、或は又希臘、羅馬邊の古代の状態に就て證するを得べきものなり、然りと雖も社會は正義の觀念を以て満足し得るやと云ふに人は皆其性薄弱なるものにして正義の觀念を以て充分之を正さんとする時は其淘汰に漏るゝ者甚た少なきものなるが如し、故に正義の觀念は之を倫理上の規則として崇

むると同時に又大に人の怖れたるものなりし事は種々の事情に依りて之を證明するを得べし、例へば閻魔大王の如きも必竟正義を以て人を裁判するものにあらずや、其他ブラマ教に於て、或は猶太教に於て正義の法則を以て正さるゝに於ては其法則の前に於て我れは罪なきものなりとして安心するを得るもの殆ど一人も之れなきの状態なりき、故に正義の觀念は倫理上の思想より起りたるものなりと雖も遂には人の大に怖るゝ所のものとなりたるなり、蓋し罪の爲めに罰せらるゝもの多くして善行の爲めに報ひらるゝもの殆ど皆無なるの状態に歸するものならん、是に於て正義の觀念を破り尙ほ高等の思想を社會に絶呼したるものは釋迦なり、ソクラテースなり、基督

なり、孔子なり、皆是れ其當時の偉人にして若之を他の事物に譬ふれば彼等の如きは他の樹木に秀で、高く天に聳え、常人の見る能はざる所を看破し、且つ正義的觀念の爲めに戦々競々として自分の罪惡の多からん事を恐れ或は又種々の方法によりて其刑罰を免れんとする所の憐れなる人間に正義以上に慈悲心あり、愛情あり仁愛あるを教へたり、是等の高等なる人情は正義の觀念以上を有るものにして一度社會に是等の高等なる觀念發達する事あらんか、正義の觀念の行はるべきは勿論の事なりと雖も其これに堪へざるものに對しては所謂慈悲、愛情を以て之を憐み、之を助け、互ひに相容るして以て益々進歩せんとするの域に達すべき事を世に教へたるなり、是を

以て古代の倫理思想に對する大革命者と看破すものなり、然るに斯の如き思想は實に當時の社會を驚したるものにして此等の革命者は當さに之を以て其社會を改良する能はざるのみならず種々の困難に出逢ひ、ソクラテース、耶穌の如きは爲めに社會の反動を惹起し、遂に身を犠牲にするの已むべからざるに至れり、孔子も亦其當時に於ては自己の説を實行する能はずして却つて社會に斥けられ、釋迦の如きに至つて數十年の後に於て大に其功を奏したりと雖も而かも其後又佛教なるものは印度より放逐せらるるに至りたるなり、社會全體を改良する實に難い哉。



### 歐羅巴に於ける近世の社會 の變遷に就て

斯の如く高尚なる道德思想の世に發表されしにも關らず  
歐羅巴の社會は常に基督教に反對するもの多く爲めに基  
督教徒は大なる迫害を受けたりと雖も其後信徒の熱心な  
るにより漸々基督教に化せらるゝに至りたるも而かも尙  
ほ彼等は正義の觀念を以て高等なる道德と看做し。所謂  
愛情の如きは高等なる道德と看做れざるの狀態にてあり  
たりき、然るに近世に於ける歐羅巴の文明は種々の方面  
より之を論すべきなりと雖も特に十八世紀及び十九世紀  
に於ける歐洲の發達は主として物理思想の發達、從つて  
經濟事情の裕かになりたるに在り、前きに生存競争の激

の  
小説に就て

しさが爲めに社會の道德衰へ、動もすれば没倫理的の行  
爲に陥りたる事あるも必竟是れ經濟事情の切迫なるに基  
けるものにして決して人生の固有性にはあらざるなり。  
故に物理学の發達と共に經濟事情は裕になり人生は自ら  
其本領を現はし、倫理思想も亦常道的の狀態を恢復せん  
とする傾向あるなり、之に加ふるに基督教徒は常に愛情  
主義を主張して已まず、愛情の正義の觀念に優さる事を  
主張するが故に常に個人の精神に之を映するのみならず  
社會一般が之を認むるに至りたるものならん、十九世紀  
の歐洲に於ける慈善事業の發達は以て之を證するに足る  
なり。

の  
小説に就て

社會狀態と倫理思想の關係

斯の如く倫理思想は其根本的の性質に於ては前後貫通するものなりと雖も其現はれ方一ならず、社會の狀態に従て種々變遷するものなり、之を家族制の變遷に就て證せん、抑も家族制なるものは現今の社會に就て之を論ずれば國に依て大に其趣きを異にする所ありと雖も、古代に溯つて之を考ふるに其狀態現今の有様程には差等のありたるにあらざるなり、例へば日本の家族なるものは其祖先を本とし、それより系統を續け一家を構へ常に祖先の祭禮を貴び、世々末々までも其系統を續けんとするを以て目的とするものなり、然るに米國に於ける家族の如きは大にこれと異り何人にてても新たに婚姻する時は直に

一家を成し、即ち家族なるものは夫婦及び其間に生じたる子供より成るものにして時に或は其老父母を養ふものもあるも多くは老父母は彼等自身の一家を備へ必らずしも其子と同居するにあらざるなり、今直ちに此兩者を比較する時は其間の差等の甚しきが爲めに奇異の感じを惹起す事あるべきも歴史に鑑み、人情に照らして之を考ふる時は其歸する所一にして種々なる變態は多く偶然の事情より發達したるものなることを發見すべし、凡そ家族なる者は其祖先を本とし其祖先の祭禮を貴ぶの風習は歐洲に於ても亦古代の風俗として存したるものなり、日本に於ては祖先崇拜の風習は古來存する所のものにして日本國體の一要素ともなるものなりと雖も而かも現今の如く

一家の系統の絶ゆるを恐れ、若し子なき時は養子をなし  
て其系統を續けんとするが如きは是れ必ずしも祖先崇拜  
と必然の關係を有するものにあらず、否斯の如きは人情  
に反するか故に之れが爲めに一家の紛擾を惹起す場合尠  
なからず、親子の愛情なきものを以て人爲的に之を子と  
見做し之を親と見做すが如きは決して當を得たるもの  
はあらざるなり、然るに斯の如き風俗の發達したるは主  
として武士の世に於ては一家に男子の戸主あつて君主に  
奉公せざるに於ては其主人よりの扶持を受る能はざるが  
故に若し自分の子なき時は他の者を養子としてこれに奉  
公を爲さしめ一家の活計を立つるの手段となしたるもの  
ならん、武士の世に於ては武家の生活に必要なものを

りしならんなれども町人百姓に至つては其必要はこれ無  
かりしも武士の風習遂に其必要な町人百姓にまでも移  
りたるにはあらざるか、是を以て之を觀れば家制の變遷  
に於て、倫理の大本即ち尊族尊敬の風習中養子の風俗の  
如き偶然的なもの混入し遂に其間に區別すべからざるが  
如き状態となりたるにはあらざるか、果して然らば倫理  
の大本に基ける事情は益々之を奨励すべきも偶然的事情  
より起りたる風俗は其必要を認めざるに至つて直ちに之  
を改良するの必要あるべきなり、或は又倫理教育に就て  
之を例せんに倫理と政治の關係に就ては種々異論ありて  
一概に之を論ずる事能はざるも儒教は倫理と政治を同一  
に見做すの主義にして必竟政治は倫理思想の社會的應用

に外ならずとするものなり。歐洲の學者は概して倫理と政治を分離せしめんとするものなり。勿論近世の學者中には又其相聯合すべきを論ずるものあるに至れり。然りと雖も元來彼等の思想によれば倫理と政治は其原則及び目的に於ては相一致すべきも之を實行する方法に至つて差異なき能はず。倫理は人の精神を支配するものにして又成るべく永久の目的及び習慣を以て之を實行せんとするものなるに、政治は之に反して急激の變に應じ、時に或は武力に訴へて社會を救済し又は權謀術數を要する場合も亦尠なしとせず。今若し此二者を混同して倫理上に權謀術數の思想を養成するとせんか、其弊言ふべからざるものあるに至らん。儒教に於ては倫理と政治とを同

一に論ずるの結果、動もすると英雄豪傑的の權謀術數的思想を以て倫理思想に混同するの風俗は我が倫理思想界にあるを見る。是れ素より偶然倫理中に混入したる一の弊風にして教理の精神にあらざるは明白なるをなりと雖も倫理と政治との別を明かにせざるより生ずるものなるも亦争ふべからざる事實なりとす。故に倫理に必要なもの、偶然之れに混じたるものを區別して益々獎勵すべきものと、益々排斥すべきものとを明かにするの必要あるものなり。

### 我國の倫理教育に就て

我國は種々なる境遇を経て發達し、其間には長き歴史を有する事なりと雖も明治の世に於ては新思想の中に生れ

たる新開國と言はざるを得ず、然るに舊來行はれたる種  
種なる俗風中には新思想と互に相扶け益々發達すべき習  
慣ありと雖も亦其中にはこれと相容れざるものなきにあ  
らず、是に於て所謂歐化主義と日本主義との二大潮流を  
生じ時に或は思想の衝突する事なきにあらざるなり、予  
を以て之を見るに固より我國には我國に固有なる團體あ  
り、又これに附屬する所の風俗習慣あつて侵すべからざ  
るものあるは説を俟たざるなりと雖も以上一二の例に依  
て之を論じたる如く團體に必然關係ある所のものと、又  
團體とは必然の關係を有せず、偶然これに混じ來つて習  
慣上恰も必然の關係を有するが如くに見ゆるもの亦尠な  
からざるが如し、翻つて又一方を觀察するに歐洲の文明

十九世紀に於て古來未曾有の盛んなる域に達し、二十世  
紀に於ては益々盛んをらんとするの狀態なり、従つて世  
界の大勢に感動し、我も亦歐洲の強列國と互ひに相列峙  
し或は競争、或は互ひに相扶け、以て益々將來に於て世  
界文明の潮流に獻納する所あらんとするの域に進みつゝ  
あるなり、是を以て之を觀れば國體上保存すべきは益々  
之を保存すると同時に是等道德即ち博愛を基とし變更改  
良すべき點は吝まらずして益々之を改良し、世界文明の大  
勢と相調和する方法を執らざるべからず、然るに其事  
柄は全く政治に於て、又外交に於て、或は教育、或は實  
業、固より其各部分に於て之を細論すべきと雖も今は倫  
理思想の方面に於て如何なる方針に進むべきやの一點に

關し愚見を述べたるなり。

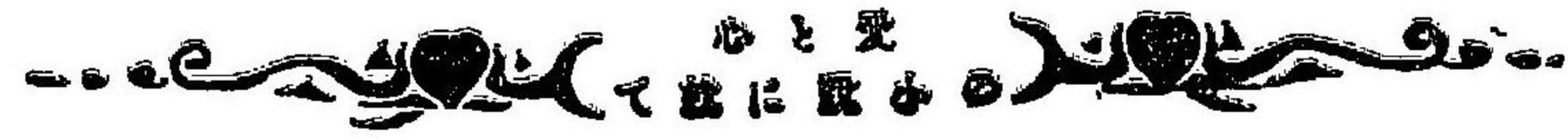
斯く云ふときは世人或は云はん我國には已に儒教あり又  
 佛教あり 儒教に於ては仁を以て最高等の道德と見做し  
 義禮智信の如きは畢竟之れに附隨するものにあらずや、  
 何を苦んで今新に西洋の愛情に關する思想を紹介して以  
 て世人を感化せんとするかと、此論一理なきにあらずと  
 雖も尙ほ考ふべき點なきに非るなり、孔夫子の仁を説け  
 る素より善し、蓋し彼れは仁の何者たるかを認識し得べ  
 き高尚なる眼光を以て之れを認識したるなり、然りと雖  
 も後の學者果して孔夫子の理解したる如く充分其理を解  
 し且つ實行し得たるや否や、之れ大に疑なき能はざるな  
 り例令儒者の中僅かの理解したるものありとするも之れ

社會一般より考ふるときは實に少數なるものにして兎に  
 角仁なる觀念の社會人心を風化し社會一般の道德となら  
 ざりしことは余の斷言するに躊躇せざる所なり、蓋し社  
 會の發達未だ其逆境を去らず、經濟事情之を許さず仁の  
 何者たるかを解するに至らざるものにして之れ又何人の  
 罪にもあらず社會發達上自然の勢なりと云ふの他なきを  
 り、然るに今や社會の状態は漸く順境に向はんとしつゝ  
 あり従て之れより益々眞の人性を發達せしむるを得る  
 に至るべきを信す。

論者或は云はん儒教の仁は最高等の道德と見做すべきも  
 耶蘇教の愛情の如きは大に非なりと、然り儒教の發達し  
 たる社會の状態と耶蘇教の發達したる社會とは大に異なる

點あり儒教の仁なるものは社會の秩序と密接なる關係あれども耶蘇教の愛情は個人主義にして其裏面には世界平等主義を包含するが如し、然れども余を以て之を見れば此等差異の存する所は畢章此等思想の發達したる社會の境遇上より偶然混入したるものにして其必然的要素のみを考ふるときは儒教の仁、佛教の慈悲、耶蘇教及ソクラテースの愛情等皆人性に固有なる高等人情を指すものなるを信するものなり然るに若し世人些細なる事に區劃を立て彼れは耶蘇教の愛、佛教の慈悲或は之れは儒教の仁なりとして互に其間に好惡の念を挿むが如きは<sup>ゆ</sup>だめた一の類にあらざるかへらの類にあらざるか區劃を立つるの時代は已に去れり度胸を大にし廣く世界の思想を入れ偶

然混入したる些細なる事情に拘はることなく各其精神のある所を取りて將來國民發達の基礎となさざるに於ては社會發達の<sup>ゆ</sup>大勢と調和すること能はざるものなること知るべきなり。



附「愛と心の小説に就て」

明明明  
治治治  
卅卅卅  
四四四  
年年年  
十十十  
一一一  
月月月  
廿廿  
五二  
日日日  
再再發  
版版  
發印  
行刷行刷

心と愛  
正價金參拾五錢



譯述者 戶澤正保

發行者 岸野英一

印刷者 大西鍊三郎

印刷所 三協合資會社

東京市神田區有樂町三丁目一番地  
東京市京橋區弓町二十四番地

發行所

東京市神田區  
錦町二丁目角

勉強堂書店

国立国会図書館



文學博士 小中村清矩先生著  
○官職制度沿革史

洋裝附全一冊 上製クロース金字入正價金壹圓貳拾錢  
並製金邊田紙稅六錢  
制度沿革の事業は範圍廣大にして支離錯綜得て究め難し從來學者此  
著を著すも概ね職名律令の陳列にのみ止まり其變遷の秩  
序を明かにして一目瞭然たる者無し是れ吾が明治學界の缺點とす今  
や故小中村博士の遺稿に成れる此書を刊行す博士が博引傍證の妙め  
るを行文流麗の點あるは世間已に定評ある所なり本書は遠く神代  
の昔より近く徳川の末世に到る三千有餘年の制度律令を網羅し持  
一々考證を明示して之れに周旋する評論を加へ平易なる文字に訴へ  
り歴史として中學及高等教育に裨益あるのみならず法制として  
法學社會の眞參考書なり

文學士 高桑駒吉先生編

東洋歴史便覽

洋裝全一冊 四六判八百頁餘  
未だ東洋歴史の參考用書として完全なる出版なし弊  
堂乞ふて出版に着手す中學校及各受驗者の良參考書  
なり

子爵國本武揚君序文 蘇東嶺富樫一耶君序文  
衆議院議長元田肇君序文 南船學校卒業松尾小三郎君文  
海軍學校校長山藤太郎君序文  
實話 航路九万八千哩  
全受附四六判洋裝美本紙數四百餘頁  
七月下旬發行

文學博士 小中村清矩先生著  
國史學の志をり

全一冊和裝美本 寫眞背價挿入 正價金五拾錢 郵稅六錢  
此書は小中村翁が上古より徳川の夫早に至るまでの國史を解説して  
之れに對する短評を加へ國史國文を學ぶ者の業とせらるるものにて博士  
が遺著として曾て故郷に頒たれたる書なり中學以上の學生諸君は勿  
論荷も國史に志ある學者受驗者等は眞の參考書なり 本書要目左  
●緒言 ●第一章 古史類 ●第二章 正史類 ●第四章 軍記類 ●第五章 武家  
記類 ●第六章 通史類 ●第七章 法制に關する書 ●第八章 通志類 ●第  
九章 朝儀に關する書 ●第十章 有徳及放實に關する書 ●第十一章 系  
譜に關する傳記 ●第十二章 地理地類

文學博士 元良勇次郎先生著

倫理及宗教

全一冊洋裝附美本 正價金四拾錢 郵稅六錢  
●第一章 緒論 ●第二章 吾國の思想界の大勢との關係 ●第三章 村上非  
上兩博士の所見を論ず ●第四章 福澤翁の修身要領を論ず ●第五章  
國家本位とは何ぞや ●第六章 個人本位とは何ぞや ●第七章 倫理の主  
觀的方面に就て ●第八章 倫理の客觀的方面に就て ●第九章 宗教論 ●第  
十章 倫理政策と倫理學との別及相互の關係 ●第十一章 本邦將來の  
發達に關する意見

文學博士 小中村清矩先生著  
○官職制度沿革史

洋裝對全一冊 上製クロロス金字入正價金壹圓貳拾錢  
並製金壹圓郵稅拾六錢  
制度沿革の事業は範圍廣大にして支離錯綜得て究め難し從來學者此  
著をなすに難し概ね職名法令の陳列にのみ止まり曾て其變遷の秩  
序を明かにして一日瞭然たる者無し是れ吾が明治學界の缺點とす今  
や故小中村博士の遺稿に成れる此書を刊行す博士が博引傍證の妙あ  
るを行文流麗の點あるは世間已に定評ある所なり本書は遠く神代  
の昔より近く徳川の末世に到る三千有餘年の制度法令を網羅し特に  
一々考證を明示して之れに用密なる評論を加へ平易なる文字に訴へ  
り歴史として中學及高等教育に裨益あるのみならず法制として法  
學社會の真參考書なり

文學士 高桑駒吉先生編  
東洋歴史便覽

洋裝對全一冊 四六判八百頁餘  
未だ東洋歴史の參考用書として完全なる出版なし弊  
堂乞ふて出版に着手す中學校及各受驗者の良參考書  
なり

子母國本 武揚君撰 藤澤謙吉君序文  
衆議院議員 元田榮君序文 藤澤謙吉君一册君序文  
商船學校長 山藤太郎君序文 商船學校卒業生尾小三郎君著  
海軍  
航路九万八千哩  
全壹冊四六判洋裝對全一冊紙數四百餘頁  
七月下旬發行

文學博士 小中村清矩先生著  
國史學の志をり

全一冊和裝美本 寫眞背像挿入 正價金五拾錢 郵稅六錢  
此書は小中村君が上古より徳川の末葉に至るまでの國書を解説して  
之れに對する短評を加へ國史國文を學ぶ者の乘とせるものにて博士  
が遺著として曾て故郷に頒たれたる書なり中學以上の學生諸君は勿  
論も國史に志ある學者受驗者等は最良の參考書なり本書要目左  
に  
●緒言 ●第一章 古史類 ●第二章 正史類 ●第四章 軍記類 ●第五章 武家  
記類 ●第六章 通史類 ●第七章 法制に關する書 ●第八章 通志類 ●第  
九章 切實に對する書 ●第十章 存實及故實に關する書 ●第十一章 系  
譜に關する傳記 ●第十二章 地理地類

文學博士 元良勇次郎先生著  
倫理及宗教

全一冊洋裝對全一冊 正價金四拾錢 郵稅六錢  
本書は出版以來旬日ならずして數千部を售罄し再版出來す實に方今  
の如き倫理宗教の晦迷時代に於ける唯一の燈臺なり宗教教育家は  
勿論世道人心に於ける所あらんとする諸君は速かに一木を購ひ早く  
其疑惑を去れ本書の價值如何は贅言せず其は左の目次を見てこれ  
知るべし  
●第一章 緒論 ●第二章 吾國の思想界の大勢との關係 ●第三章 村上井  
上兩博士の所見を論ず ●第四章 福澤翁の修身要領を論ず ●第五章  
國家本位とは何ぞや ●第六章 個人本位とは何ぞや ●第七章 倫理の主  
觀的方面に就て ●第八章 倫理の客觀的方面に就て ●第九章 宗教論 ●第  
十章 倫理政策と倫理學との別及相互の關係 ●第十一章 本邦將來の  
發達に關する意見









